

# 琉球大学学術リポジトリ

## トゥバラーマ〈恋歌〉の分類

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, 政美, Tamaki, Masami メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/2409">http://hdl.handle.net/20.500.12000/2409</a>

## トゥバラーマ〈恋歌〉の分類

玉 城 政 美

### はじめに

琉球の歌謡文芸を1 儀礼歌謡、2 歴史歌謡、3 物語歌謡、4 抒情歌謡の四分野に分類すると、八重山諸島のトゥバラーマは、奄美・沖縄諸島の琉歌（ウタ・シマウタ）、宮古諸島のトーガニ、与那国島のスンカニ、多良間島のシュンカニとともに、抒情歌謡の分野を構成する。現在も創作され歌集としてまとめられることのある、新作のトゥバラーマを除いても、『南島歌謡大成IV八重山篇』に約300首が記録されている。文学研究の立場からは、トゥバラーマの歌詞を個別的に分析し、それをふまえて、民俗ジャンルとしてのトゥバラーマの特性を位置づける課題が残されているが、ジャンルとしてのトゥバラーマの特性と一口にいても、その基礎になっている、個々の作品の主題は多様である。したがって、ジャンルの特性を位置づける前に、主題の観点からトゥバラーマをおおまかに分類しておく必要がある。暫定的であるが、私見によればトゥバラーマは、Ⅰ恋、Ⅱ祝い（葬儀）、Ⅲ風土、Ⅳ人生観（境涯・懐旧・家族・教訓）、Ⅴ旅、Ⅵ自然、Ⅶ歌、Ⅷ笑いに分類される。日本古典文学の、和歌の部立では、四季、恋、雑に三大分類するが、琉球の抒情歌謡を分類するに際しても、当面それにならってみることにしたい。琉歌には、上記の、すべての部立が揃っているが、宮古・八重山の抒情歌謡には、四季の歌がみられず、恋歌と雑歌（Ⅱ～Ⅷ）が構成の基本をなしている。そして、とくに雑歌は、琉球の抒情歌謡の独自性を示す内容が多いので、独自の分類案が要請される。抒情歌謡の分類は今後に多くの課題を残しているが、本稿ではトゥバラーマの恋歌を分析対象として先行させることにした。

トゥバラーマの恋歌に所属する個々の歌謡を、具体的な内容の観点からみると、それぞれが他の歌謡と区別される独自性を持つが、一般的な側面では他の歌謡と共通の特徴でつながっている。つまり、ある歌謡は、他の複数の歌謡と

つながって一つのグループを構成し、それらは他のグループの歌謡と区別される特徴を共有するのである。個別に存在するトゥバラーマの恋歌を一定のグループにまとめあげたり、グループ相互間を区別する特徴を探り出したりする、分類作業を本稿の課題としたが、そのためには個々の歌謡の構造分析と主題の抽出作業が先行していなければならない。

抒情歌謡の表現する内容と構造を《自らをとりまく環境との関係のなかで、抒情主体の心に生じる、個々の状態》とおおまかに規定しておくことにする。

〈抒情主体〉とは作者のことではなく、作中で「私」として示される人物のことである（たとえば抒情主体は、恋する男や女、家族の死を嘆く妻や夫、旅人、家郷に残る妻、老いを嘆く人、老いて意気盛んな人、しみじみと過去を回想する人、若さを謳歌する人、客に酒や歌舞を勧める主、祝宴に招かれて祝辞を述べる客、酒宴で末長い交友を誓う人、任務地を離れていく役人、島に残される旅妻など、さまざまに性格づけ＝役割化されていて、この項目自体が、抒情歌謡の重要な分析対象である）。抒情主体をとりまく環境にはどのようなものがあるか、その構成要素を列挙する必要があるが、恋歌で抒情主体が関係する主要な環境は〈相手〉と〈状況〉であろう。相手との関係のなかで、抒情主体の心に生じる感情＝恋心が、恋歌の構造上の中心軸となる。そしてもう一つの軸は、抒情主体をとりまく状況である。抒情主体は、作中の設定された状況のなかに存在し、この状況のなかで、あるいはこの状況にたいして、なんらかの心を表現している（恋歌では抒情主体のおかれた状況を直接的に描き出すことは少ないが、抒情主体の心の動きや状態から推測できることが多い）。相手や状況との関係のなかで、抒情主体に生じる心は、個別具体的には、一目見たばかりの彼女が忘れられない、私の愛を受け入れてください、あなたの愛を受け入れます、私はあなたを諦める、結ばれたばかりのあなたへの愛が深まっていく、もっと深く私を愛してください、二人の心は死ぬまで変わらない、あなたは私を愛していないのではないか、私を捨てないでください、あなたと離れているのが辛い、彼女に会うために人目を避けて通っていく、彼の訪れを待っている、やっとあなたに会えて嬉しい、あなたと別れていくのが辛い、私のことは諦めてください、あの方は心変わりしてしまった、などのかたちで表現されている。

個々の作品に表現されたこれらの心は相互に差別的であるが、これらを共通する特徴に基づいてまとめあげる必要がある。

多様に展開されている、恋歌の心を分類するために、最初の基準として、抒情主体と相手との〈恋愛関係の成否〉の観点を設定してみた。二人の間に恋愛関係が成立しているのか、まだ成立していないのか、成立後に破綻したのかということは、関係のありかたのもっとも大きな差異であるし、それは心のありかたの大きな差異をも示すであろう。恋愛関係の成否の観点からすると、トゥバラーマの恋歌は、1 関係の未成立の歌、2 関係の成立の歌、3 関係の破綻の歌、の三つのグループに大きく分類することができる。それぞれのグループの間では心に大きな差異がある。また、それぞれの内部においても心の差異があるので、分類をさらに進める必要がある。この大状況のなかにはさらに小さな状況があって、そのなかで抒情主体は異なる心を持つものとして表現される。しかし、このことを状況が抒情主体の心を一方的に規定すると考えるべきではないだろう。なぜなら、同じような状況であっても異なる心を持つこともあるので、状況だけではなく、そこには性格も絡んでいるのであろう（たとえば〈一時的な離別〉の状況のなかで、相手のもとへ通いたがる心、相手の訪れを待つ心、面影を浮かべて辛く思う心など、同じ状況のもとでも異なる性格があらわれている）。抒情主体の性格（＝個々の心から判断される性格）と小状況の相関のありかたにしたがって、心の動きや状態はさらに区分される。1 〈関係の未成立〉のグループは、(1)関係の成立を願望しながらも相手に伝えず自分の胸中におさめている〈思慕〉の歌と、(2)関係を成立させるために相手にはたらしきかける〈求愛〉の歌と、(3)関係が成立する以前に破綻した〈失恋〉の歌とに区分される（琉歌とトーガニには第四のタイプとして〈受諾〉の例があるが、今のところトゥバラーマでは確認できていない）。2 〈関係の成立〉のグループは、(1)相愛の歌、(2)愛の葛藤の歌、(3)一時的な離別の歌に区分される。さらに(1)相愛の歌は①愛の始まりの歌、②愛の依頼の歌、③愛の確認の歌、④愛の不変の歌に、(2)愛の葛藤の歌は①疑いの歌、②破綻の恐れに、(3)一時的な離別の歌は①恋人と離れている局面の歌、②恋人のもとに通う局面の歌、③恋人を待つ局面の歌、④恋人と会う局面の歌、⑤互いが離れていく局面の歌

など、より小さな局面に分割された心によって区分される)。そして、3〈関係の破綻〉のグループは(1)破綻寸前、(2)破綻の歌がある。なお、破綻の歌は、破綻直後の感情を表現しているものがここに区分されるが、トゥバラーマには、破綻後ある程度長い時間を経過した時点での感慨、遠い過去を回想するかたちでの感慨を表現したタイプが数多くみられる。これらは、昔の恋を回想したものとのみならず〈人生観〉のなかの「懐旧」に分類すべきだと考えているが、恋歌と深い関係にある領域なので、恋歌の全貌を見渡す必要からここにも提示しておくことにする。

トゥバラーマ〈恋歌〉の分類は次のようになる。

#### 1. 関係の未成立

- (1) 思慕
- (2) 求愛
- (3) 失恋

#### 2. 関係の成立

- (1) 相愛 (①愛の始まり②愛の依頼③愛の確認④愛の不変)
- (2) 愛の葛藤 (①疑い②破綻の恐れ)
- (3) 一時的な離別 (①離れている②通う③待つ④会う⑤離れていく)

#### 3. 関係の破綻

- (1) 破綻寸前
- (2) 破綻

#### 4. 昔の恋

### 第一章 関係の未成立

抒情主体と相手との間に恋愛関係がまだ成立していない状況のときに、抒情主体の心に生じる感情の動きや状態には(1)思慕、(2)求愛、(3)失恋がある。(1)思慕はまだ恋心を相手にうち明けていない段階であり、(2)求愛は相手の心を獲得するためのはたらきかけであり、(3)失恋は相手の心を獲得できなかった結果のあらわれである。琉歌とトーガニには求愛を受諾する歌があるが、トゥバラ

マでは確認できていない。

## 第一節 思慕

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第一のタイプは、思慕＝片思いである。思慕の歌は、相手にたいするはたらきかけ（告白）をさしひかえて、自分の内面を内省するかたちで心を表現する。

思慕の歌は①思い初めて苦しい、②告白できずに焦がれ泣いている、③思いを知らせたい、④思いを察してほしい、⑤いつか彼女と語り合いたい、⑥彼女を思いのままにしたい、⑦思っではいけない人を思ってしまう、⑧思うまいと決心するが思いが勝ってしまう、などという心を表現する。

### ① 思い初めて苦しい

次の事例は、十五夜に一目見た人を深く思い初めてしまった胸が苦しい、と思慕の始まりを表現している。

[資料1]

122 ぴとうみ みやーいくだ	一目見た
じゅんぐやから	一五夜から
きいむに うむいすめぬ	心に思い染めた
んにぬ くりしゃ	胸の苦しさ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ262)

[訳] 一目見た十五夜以来心に思い初めてしまった胸が苦しい。

### ② 告白できずに焦がれ泣いている

次の事例は、自分の「焦がれ心」を告白することができずに、相手の面影を抱いてただ泣いてばかりいる、思慕の心を表現している。「取りいいだしん ならぬ（取り出すこともできない）」というのは、言葉などに表現して明確なかたちで相手に示すことができない状態をさすのであろう。

[資料2]

- |    |             |          |
|----|-------------|----------|
| 58 | くがりくくるや     | 焦がれ心は    |
|    | 取りいいだしん ならぬ | 取り出しもできぬ |
|    | うむかぎ だぎり    | 面影を抱いて   |
|    | なきまでいどう しらり | 泣くだけである  |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ198)

[訳] 焦がれ心は取り出すこともできない。面影を抱いていてただ泣くばかりである。

[資料3]

- |   |           |            |
|---|-----------|------------|
| 2 | 焦がり心や     | 焦がれ心は      |
|   | 取り出しん ならぬ | 取り出しができない  |
|   | 面影 抱ぎり    | 面影を抱いて     |
|   | 泣きまでど しらり | 泣くだけしかできない |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ104)

[訳] 焦がれ心は取り出すこともできない。面影を抱いていてただ泣くばかりである。

[資料4]

- |   |            |             |
|---|------------|-------------|
| 1 | 焦がり心や      | (思い) 焦がれた心は |
|   | 取り出しん ならぬ  | 取り出すことが出来ない |
|   | 面影 抱ぎり     | 面影を抱いて      |
|   | 泣きまでどう しらり | 泣くばかりだ      |
- (大浜方叶)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ117)

[訳] 焦がれ心は取り出すこともできない。面影を抱いていてただ泣くばかりである。

次の事例は、前の三例と上句は同じ。下句は「面影を抱いてトゥバラーマを歌ってごらん」となっているが、文法におかしい。「いじみようり」ではなく「いじみょうら(歌ってみよう＝一人称・意志)」ではないか。思慕

の心を告白できないので、そのかわりに歌を歌って気持ちを紛らそうという意志の表現であろう。

[資料5]

59	くがりくくるや	焦がれ心は
	取りいいだしん ならぬ	取り出しもできぬ
	うむかぎ だぎり	面影を抱いて
	とぅぱりゃーま いじみようり	トゥバラーマを歌ってごらん

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ199)

[訳] 焦がれ心は取り出すこともできない。面影を抱きながらトバラーマを歌ってみましょう。

③ 思いを知らせたい

次の三例も、「胸の思い」「肝の思い」など、心の思いを告白することができたらいいのに、それができずにいる。前の二例は告白できない理由を明示していないが、後の一例は「愛しい人を見ると胸が張り詰まる」ためだと表現している。

[資料6]

13	胸ぬ 思いゆ	胸の思いを
	打ち明け しいさるば	打ち明けて知らせられたら
	わ 肝ぬ くりしゃゆ	心の苦しさを
	取り出し みしらるば	取り出して見せられたら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ17)

[訳] 胸の思いをうち明けることができたらいいのだが。私の心の苦しさを取り出して見せることができたらいいのだが。

[資料7]

49	きいむぬ うむいゆ	胸の思いを
	出だし みらるばら一	出してみられたらね
	んにぬ くりしゃゆ	胸の苦しさを
	ぴらき しらさりば	聞いて知らされたら



(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ189)

〔訳〕心の思いを出すことができたらいいののだが。胸の苦しさを開いて知らせることができたらいいののだが。

〔資料8〕

2 かぬしやま 見りば	愛しい人を見れば
胸ん 張り詰まり	胸も張り詰まり
打ち明き苦しや	うち明けにくい
胸ぬ 思い	胸の思い

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ78)

〔訳〕愛しい人を見ると胸も張り詰まってしまって、うち明けがたい、この胸の思いは。

#### ④ 思いを察してほしい

次の事例は、告白できない自分の思いを相手が察してくれることを願望する表現である。上句の「他所に 言ざりる むぬゆ やらば(他人に言えるものならば)」をめぐる解釈が微妙である。まず「よそ(他人)」の示すものが①相手であるか、②第三者であるかが問題である。①であれば、いわゆる「告白」であり、「他人(あの方)に言えない」理由は、抒情主体の性格＝事情によるものと考えられる。性格的にあるいはなんらかの事情によって告白できないと解釈される。②であれば、恋歌に多く表現されているように「二人の仲を他人に知られたくない」ので「他人に言えない」というものであろう。琉歌にあるように、他人は恋路の障害となるものである。「与所に しらすな おみわらへ はなに 夜あらしの ふかん しよもの(二人の仲を他人に知らすな恋人よ、花に夜嵐のとえもあるのだから。)」(『古今琉歌集』796)。この事例は①「相手に告白できない心」と解釈してここに分類した。「思いぬ かなしやま(思っている愛しい人よ)」という表現から判断すると、相手は眼前には存在していなくて、抒情主体の想像のなかにいるから、「察しひりよー(察してくれよ)」は、直接的な告白ではなく、心のなかでの願望の意となる。

[資料9]

2 他そに 言ざりる	他人に言える
むねゆ やらば	ものならば
思いぬ かなしやま	思いの愛しい人
察しひりよー	察してくれよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ82)

[訳] 他人に言えるもの(胸内?)ならばいいのにね。愛しい人よ察しておくれ。

⑤ いつか彼女と語り合いたい

次の事例は、愛しい人のことが忘れられず、いつの夜にか語り合いたいという願望を表現している。「胸から降ろす」とは「忘れる」ということである。彼女のことが忘れられないので、語り合うことで胸の思いを晴らしたいのであろう。

[資料10]

51 きむの かぬしゃま	心の愛しい人
んにから うるさるぬ	胸からおろせない
いちいぬ ゆどう	いつの夜に
かたらいみらり	語れよう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ191)

[訳] 愛しい女のが胸から降ろせない。いつの夜に語り合うことができるのだろうか。

⑥ 彼女を思いのままにしたい

次の三例は、愛しい人を自分の思いのままにしたいという願望を表現している。上句の「露を受けて花は育つ」は自然の法則を説いているが、その裏には、花が露なしでは育たないように、私にも愛しい乙女が必要だという心もひそめている。彼女なしでは生きていけないということが前提となって、下句と論理的につながっていくのである。琉歌風にいえば「花と露の縁」で

あるが、琉歌では、花＝女、露＝男であり、ここの事例では逆になっている。

[資料11]

1 つゆや うくばど	露を受けて
花や すだかりる	花は育つ
かなし みやらび	いとしい乙女は
我ぬ まま なしたぼり	私の思いのままにさせてください

(作詞 山里勇吉)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ129)

[訳] 露を受けてこそ花は育つものである。愛しい乙女を私の思うままにさせてください。

[資料12]

2 露ん 受くばど	露を受ければ
花や 育だかりる	花は育つ
かぬし みやらび	愛しい乙女を
我 ま なしたぼり	私の思うままにしてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ84)

[訳] 露を受けて花は育つものである。愛しい乙女を私の思うままにさせてください。

[資料13]

79 つゆや うくばどう	露を受けてぞ
はなや すだかりる	花は育つ
かぬし みやらび	愛し乙女は
吾 まま なしたぼうり	私のままにしてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ219)

[訳] 露を受けて花は育つものである。愛しい乙女を私の思うままにさせてください。

⑦ 思っではいけない人を思ってしまう

次の事例は、浮世の義理によって阻まれた相手を愛してしまい、その思い

を断念しようとするが、くりかえし愛する思いが勝ってくる心を表現している。義理の内容が抽象的ではっきりしないが、家柄や身分の格差などであろうか。沖縄諸島の抒情歌謡「琉歌」には恋を阻む義理が盛んに表現されていて、琉歌の重要なキーワードである。「つれなさや ゆめの 世のなかにをとて 朝夜 義理の 上に おもひ くたち (夢のようなはかない世の中に生れて、朝夕義理にしばられて思い屈しているのは辛いことだ。)」(『古今琉歌集』431)

[資料14]

55 ぎりぬ うきゆに	義理の浮世に
生りだる ゆいに	生まれた故に
うむいや ならぬで	思っではいけないが
またん うむい	またも思い

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ195)

[訳] 義理の浮世に生まれたために、思っではいけない人だが、またも思っ  
てしまう。

⑧ 思うまいと決心するが思いが勝ってしまう

次の事例も、断念する理由は義理である。宮城信勇著『石垣方言辞典』の「カニ タティン」の項に「義理をたてる。義理をまっとうする。」とある。以下の事例の「かにだち」「かにたて」「かねたて」はこれに対応するであろう。義理によって愛を断念しなければならない立場にある。しかし、自分の心は、抑制できない。それどころか逆にますます思いが増すばかりである。相手にたいする思慕の情を制御できずにいる心を表現している。

[資料15]

2 思まぬでど かにだち	思わないと決心して
思ひうそんが	思っているが
きむど やりや	気持ちであるので
思ひや まさりど し	思いは勝る

(作詞 花城宏)

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ128）

[訳] 思うまいと義理立てしているが、心のことなので思いは勝るばかりである。

[資料16]

24	思うぬでど	思わないと
	かにたて うそんが	決心していたが
	肝ど やりや	心だから
	うむい まさりど す	思いはまさる

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ164）

[訳] 思うまいと義理立てしているが、心のことなので思いは勝るばかりである。

一度の交情で「関係の成立」がゆるぎないものとなるとは限らないようであり、そのような事情を窺わせる事例がある。以下の「なせーる なか（できた仲）」「なれる 仲（できた仲）」は、関係の成立した間柄であることを示すが、しかし、まだ完全に関係が成立しているとはみえない。義理やなんらかの理由によって相手と隔てられているのである。義理などのために「思わないと決心」せざるをえない境遇にあるが、しかし、それが不可能で、思慕の情が断ち切れずに嘆いている。琉歌にも類似した状況の歌がある。「れんり 御枕に 結て ある 御縁 龜相にとも めしやな 節す あらまへ（連理御枕に結んであるご縁を粗末になさいますな。またの時節もあるはずだから。）」（『天理本琉歌集』734）。一度結んだ枕の縁を関係の成立とせず、なお「時機を待て」という。『南島歌謡大成II沖繩篇下』は「せつす あらまい」を「またの時節もあるはずだから」と解釈しているが、「次の機会」という意味ではなく、「完全な関係が成立する時機」の意味であろう。ほかにも類歌がある。「義理 ともて 里前 せつよ まちめしやうれ むすて ある 縁の あたに なよめ（義理だと思って時節を待って下さい恋人よ、結んである縁があだになることはないのだから。）」（『古今琉歌集』427）。この例でも縁を結んだ仲でありながら義理に隔てられていて、時機を待つ関係

が表現されている。なお、トゥバラーマのこの事例を、完全な「関係の成立」以後のものであると解釈すれば、「関係の破綻」の未練の歌となる。

[資料17]

23 思うぬでどう	思わないと
かにたて ばな うだる	決心して私はいた
なせーる なかや	出来た仲は
思うぬで うらるぬ	思わないでおられない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ163)

[訳] 思うまいと義理立てして私はいたが、できた仲は思わないでいられない。

[資料18]

2 思うぬでど	思わないと
かねたて うそんが	決めているが
なれる 仲や	出来た仲は
思いど まさる	思いがまさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ94)

[訳] 思うまいと義理立てしていたが、できた仲は思いが勝るばかりである。

[資料19]

2 思らぬでど	思わないと
義理 立て 居しが	決めているが
なれる 仲や	出来た仲は
まさりど 思うり	かえって思える

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ114)

[訳] 思うまいと義理立てをしていたが、できた仲はますます思われる。

次の事例の「胸ば なでうらし (胸を撫でおろし)」は、安心したということではなく、逆に、落ち着かない心を静めるしぐさのことであろう。

[資料20]

104 なれる 仲	できた仲は
-----------	-------

思ふなで うらるぬ	思わないではおれない
明きりやん 暮りりやん	明けても暮れても
胸ば なでうらし	胸を撫でおろし

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ244）

【訳】できた仲は思わないではいられない。明けても暮れても心を静めようと胸を撫でおろすばかりである。

## 第二節 求愛

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第二のタイプは、求愛である。求愛の心は、思慕の段階よりも一歩進んで、相手に自分の心を表明し告白する段階である。

求愛の歌は①受け入れてほしい、②あなたの愛を得たい、③愛するのはあなた一人、④二人は夫婦になる運命だ、⑤早く承諾してくれ、⑥抱きたい、などという心を表現する。

### ① 受け入れてほしい

次の事例は、自分の頼むことを聞き入れてくださいと相手に依頼する表現である。「頼むこと」とは、愛を受け入れてほしい、ということであろう。

#### 【資料21】

170 んばで いじひーな	否と言ってくれるな
ゆむで うむいひーるな	否と思ってくれるな
たのむ くとぅ	頼むことを
しいき受け たぼうり	聞きとめてください

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ310）

【訳】否と言ってくれるな、いやと思ってくれるな。頼むことを聞き入れてください。

次の事例は、心に思っていることを直接言葉で告白することができないから、それを歌に託すので察してほしいと表現する。情歌トウバラーマは愛を

伝えるのにふさわしいものがある。

[資料22]

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1 肝ぬ 思うんで | 心が思っても       |
| 口から 出ださるぬ | 口から出せぬ       |
| とばら一ま 言ざば | トゥバラーマ歌を歌うから |
| 察しひりよう    | 察してください      |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ97)

[訳] 心に思っているけど口から出せない。トゥバラーマを歌うので察してください。

次の事例の「なま いざば」を『南島歌謡大成IV八重山篇』が「今謡うから」と訳しているように「いず(言う)」には、「歌う」という意味もある。これも歌に託した思いである。

[資料23]

- |            |          |
|------------|----------|
| 54 きむに すまる | 心にそまる    |
| かずかずぬ うむい  | かずかずの思い  |
| なま いざば     | 今謡うから    |
| しきとりひーりよう  | 聞きとっておくれ |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ194)

[訳] 心に染まっている数々の思いを、今、歌うので聞きとってください。

② あなたの愛を得たい

次の事例は、蕾がふくらんで露を待つように、あなたの愛を待っているの  
で、情をかけてください、と依頼する表現である。「かぬしゃま はな」は、  
愛しいあなた=露、私=露を待つ花、という関係であろうか。

[資料24]

- |              |            |
|--------------|------------|
| 45 かぬしゃま はなや | 愛しの花は      |
| ふくらみ まちそんが   | ふくらみ待っているが |
| 情ゆ 給うり       | 情けをください    |
| さかな一で うらるぬ   | 咲かずにはおれない  |



(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ185)

[訳] 愛しい人の花はふくらんで待っている。情を掛けてください、咲かすにはいられません。

③ 愛するのはあなた一人

次の事例は、自分の愛するのはあなた一人だけだ、と告白し相手の愛を期待する表現である。なお『南島歌謡大成IV八重山篇』は「うるぬ」を「いるが」と訳しているが、打消しの意で「居らぬ」であろう。『南島歌謡大成IV八重山篇』のように「私にはたくさんの愛人がいるが、そのなかで真に愛しているのはあなただけだ」というのではなく、「私にはたくさんの愛人はいない、あなただけを愛している」ということであろう。

[資料25]

82 天ぬ 星だき	天の星の数ほど
かぬしやま うるぬ	愛しい者がいるが
肝ぬ さだみや	心に定める者は
うらど うらみ	あなた一人だ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ222)

[訳] 天の星数ほどに愛しい人はいません。心に定めているのはあなた一人だけです。

④ 二人は夫婦になる運命だ

次の事例は、あなたと私は天から夫婦になれと言いつけられていると、夫婦になる運命であることを強調して相手の承諾を迫る表現である。

[資料26]

80 天からど	天から
うらと ばんとや	あなたと私は
みゆと なりで	夫婦になれと
いちけたぼる	言いつけなさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ220)

[訳] 天から、あなたと私は夫婦になれと、言いつけられているのです。

⑤ 早く承諾してくれ

次の事例は、承諾の返事を催促するものであるが、「雨だれの水にびっしょり濡れて」という表現は自分の誠意を強調するものであろう。

[資料27]

1 あまだりいぬ みじいに	雨だれの水に
すぶとう ぬりてい	びっしょり濡れて
なるか ならぬか	(私との仲が) できるかできないか
ひぐな一 ひんじ	早く返事を
しいかしひりな一	聞かせてくれよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ55)

[訳] 軒端の雨にびっしょり濡れながら待っている、さあいっしょになれるかなれないか、早く返事を聞かせてくれ。

⑥ 抱きたい

次の二例は、磯や海の小魚が焼いて香ばしくなるように、愛しい女は抱いて愛しさが増す、というかたちで求愛する表現である。魚は焼けば香ばしくなるという道理を持ち出して、女性も同様であるとする論法で相手を説得しようとしているのであろう。

[資料28]

9 いしゆぬ いぞーまや	磯の小魚は
焼きばどう かばさーる	焼けば香ばしい
かぬし めるびや	愛しの乙女は
だぎばどう かなさーる	抱けば愛しい

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ149)

[訳] 磯の小魚は焼いてこそ香ばしくなる。愛しい女は抱いてこそ愛しくなる。

[資料29]

15 いんぬ いずや	海の魚は
やかばどう かばさーる	焼けば香ばしい
かなさーる かぬしゃま	愛しの愛人は
だがばどう かばさーる	抱けば香ばしい

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ155〕

〔訳〕 海の魚は焼いてこそ香ばしくなる。愛しい女は抱いてこそ香ばしくなる。

宮古の抒情歌謡トーガニの事例は求愛が明確。なお、「ばんの びきりや」の対訳「わが男」は誤りで「男である私（私＝男）」の意。訳は「干瀬で碎ける波でさえ、浜を打ってから静まるものだ。私は男として、愛する女を抱いてから静まるのだ。」。

干瀬んな 折 浪であむど	干瀬に打ち碎かれる波でさえ
浜や うち やばんま もの やうい	浜を打ち止もうものを
ばんの びきりやや	わが男は
おもゆる ヲならよ	思う女を
だけど やばむ やうい	抱いてこそ止むよ

〔『南島歌謡大成III宮古篇』「宮古島の歌」たうがね62〕

### 第三節 失恋

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第三のタイプは、失恋である。失恋は、相手の心を獲得できなかった状態である。

失恋の歌は①受け入れてもらえず諦める、②思いが深すぎて諦められない、③親が許さずまならない、などという心を表現する。

① 受け入れてもらえず諦める

次の事例は、愛する人の家の通りを何度も通ったが、ついに承諾の返事をもらえず諦める心を表現している。

[資料30]

1 なかどう道から	なかどう道から
七けら 通ゆるけ	七回通っても
仲筋かぬしゃま	仲筋カヌシャマは
相談ぬ ならぬ	相談ができない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ2)

[訳] なかどう道から何度も通ってみたが、仲筋家の愛しい女は相談ができない。

[資料31]

93 なかどうみちいから	仲通道から
ななけーら かようけ	七回通っても
なかしいじい かぬしゃーま	仲筋の愛しい人は
そうだんぬ ならぬ	相談ができぬ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ233)

[訳] なかどう道から何度も通ってみたが、仲筋家の愛しい女は相談ができない。

[資料32]

1 なかどうみちいゆ	中通道を
ななけーら かようだそんが	七回通ったが
なかすめー むんどう	中すめー (地名) 問答は
そうだんぬ ならぬ	相談ができない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ34)

[訳] なかどう道から何度も通ってみたが、中すめー (地名) 問答は相談ができない。

次の事例は、南の空で輝く星に橋が架けられないように、心を知ってもらえない彼女に手を掛けることはできない、と無理解な彼女を諦める心を表現している。『南島歌謡大成IV八重山篇』は「無蔵」を「あなた」と訳している。確かに無蔵は呼称としても用いられるが、ここは眼前にはいない、無

理解な彼女として待遇し、諦める心境であろう。

[資料33]

12 南が 星かい	南が星へ
橋ぬ 架きらりみ	橋が架けられるか
肝 知らん 無蔵かい	心中の知らないあなたに
手 かきぬ ならぬ	手出しはできぬ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ16)

[訳] 南の星へ橋が架けられるか。心を知ってもらえない彼女に手を掛けることはできないよ。

② 思いが深すぎて諦められない

次の事例は、思いが深すぎて諦めることもできず、ふたたび会って語り合いたい、という未練の心を表現している。

[資料34]

20 うむいぬ ふかさ	思いが深く
あきらみん ならぬ	あきらめもできない
またん いかいり	またも行き会い
かたらい みらるば	語りあえたら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ160)

[訳] 思いが深すぎて諦めることもできない。またも行き会って、語り合えたらいいのだが。

③ 親が許さずままならない

次の事例は、愛しい人と私とは思い合う仲なのだが、親が許さないので思いはままならない、という。当事者どうしは相愛の関係であっても、親の許可が得られない以上、二人の関係は不完全なものであり、未成立とみなされるべきであろう。

[資料35]

40 かぬしゃとう ばぬとうや	愛しい人と私とは
-----------------	----------

うむいぬ なか やしが	思いの仲なのだが
うやぬ ゆるさぬ	親は許さない
うむいや まま ならぬ	思いはままならぬ

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ180）

〔訳〕 愛しい人と私とは思い合う仲なのだが、親が許さないので思いはままならない。

### 〈受諾の歌〉

琉歌とトーガニには、関係の未成立の第四のタイプとして〈受諾〉の歌があるが、トゥバラーマでは確認できていない。トーガニからその例を示すことにする。なお、受諾の歌は、トーガニでもこの一例だけが確認できている。

あがいたんでい すまりゃい	やれ スマリャよ
すまりゃが みぬ なた	スマリャの涙を
あがいたんでい すまりゃい	やれスマリャよ
うがみどう うきゃーでい	ありがたく受けよう

（『城辺町史』）

〔訳〕 ああ、愛しい人よ、愛しい人の目の涙を、ああ、愛しい人よ、それを拝見したのであなたの思いを受け入れましょう。

## 第二章 関係の成立

抒情主体と相手との間に恋愛関係が成立している状況のときに、抒情主体の心に生じる感情のありかたは、互いの愛を確認する肯定的な感情を表現したものが案外多い。和歌の恋歌と比較して、このように肯定的な感情を表現した歌が多いのは、琉球の抒情歌謡の特徴であるといえるだろう。だが、二人の間に相愛関係があるにしても、あるいはあるからこそ、否定的な感情を表現することもある。相手にたいしてより深い愛を求めて不満を訴えたり、相手の愛を疑ったりする。また、「一時的な離別」の状況において、逢瀬の後にやがて別れの

時がくるが、その別れ路の悲しみや辛さを表現する。さらに、同じく「一時的な離別」の状況の時に、相手を恋しく思う気持ち、会えずに戻るときの気持ち、あるいは待ち合わせている相手があらわれるのを待つときの気持ちなどを否定的に表現することもある。たとえ、二人が相愛の関係にあるにしても、恋の感情は複雑・多様であり、恋歌にはその多面的な恋のありさまが表現されている。

関係の成立の歌は、第一節相愛、第二節愛の葛藤、第三節一時的な離別に分類し、これらをさらに区分してみた。

## 第一節 相愛

相愛の歌は、(1)愛の始まり、(2)愛の依頼、(3)愛の確認、(4)愛の不変、などの心を表現するが、これらはさらに微細な局面に分かれる。

### 第一項 愛の始まり

愛の始まりの歌は①契りを交わした彼女の面影が心に染まっている、②一夜の情が心に染まっている、③初めて契った彼女が夢に現れた、④二人の契りは百果報を頂いたようだ、などの心を表現する。いずれも、契りを交わした直後に生じた感情を表現している。

#### ① 契りを交わした人の面影が心に染まっている

次の二例の「むすべる なさき(結んだ情)」は、最初の交情をさしているであろう。それが忘れられず、深く心に染みていることを表現している。相愛の始まりの段階を示している。

#### [資料36]

154 むすべる なさきや	結んだ情けは
んにから うるさるぬ	胸からおろせない
かぬしゃ うむかぎ	愛しい人の面影は
きいむに うむいすまる	胸に思い染まり

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラマ294)

[訳] 結んだ情は胸から降ろせない。愛しい女の面影は心に思い染まってい

る。

[資料37]

41 かぬしゃま うむかぎ	愛しい人の面影は
んにから はなさるぬ	胸から離せない
むすべーる なさきどう	結んだ情けが
しくしく うもうりそう	たいそう思えるよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ181)

[訳] 愛しい女の面影は胸から離せない。結んだ情がしみじみと思い起こされるよ。

次の事例は、「結んだ情」とか「一夜の情」などの、交情をあらわすことばがないので、思慕=片思いの歌と解釈するのがすなおかもしれない。しかし、愛しい人の面影が「胸の底に目覚める」という心は、単純な思慕の始まりよりもいっそう深く愛に目覚めた心をいうように思われる。そしてそれは交情のような、深く印象に残る事件に由来しているのではないだろうか。「今日の今まで思い出してばかりいる」ということばには、あのできごとの時から今に至るまでの間という意味合いがあるのではないだろうか。

[資料38]

39 かぬしゃ うむかじ	愛しい面影が
んにぬ すく めざめ	胸の底に目覚め
きゅぬ なままでい	今日の今まで
うむいいだし	思い出し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ179)

[訳] 愛しい人の面影が胸の底で目覚めてしまって、今日の今まで思い出してばかりいる。

② 一夜の情が心に染まっている

次の事例も、「一夜の情が胸に染まっている」ということばが、相愛の始まりの段階を示している。そのために、朝夕の思いは語り尽くせないのである。



[資料39]

125	ぴとうゆぬ なさき	一夜の情けが
	んになんが すまり	胸に染まり
	あさゆうぬ うむい	朝夜の思い
	かたりつくさる	語りつくされぬ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ265)

[訳] 一夜の情が胸に染まって、朝夕の思いは語り尽くせない。

③ 初めて契った彼女が夢に現れた

次の事例の「あらばな さかし (新しい花を咲かせた)」というのは、最初の交情をさしているし、それは「昨夜」のことであるから、相愛の始まりの段階にある。その余韻で愛しい人が夢に現れたのである。

[資料40]

167	ゆびが ゆや	夕べの夜は
	あらばな さかし	新しい花を咲かせた
	かぬしゃーま	愛しい人が
	いみ なり みられー	夢になって見えた

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ307)

[訳] 昨夜は新しい花を咲かせた。愛しい人が夢に現れた。

④ 二人の契りは百果報を頂いたようだ

次の事例は、「彼女と私との結ぶ暁」ということばに交情がはっきりしているが、後半の「物黄金果報を給わる」ということばの意味がはっきりしない。相愛関係の成立に感謝しているのであろうか。

[資料41]

169	んぞとう ばぬとうぬ	あなたと私との
	結ぶ あかつきいや	結ぶ暁は
	むぬくがに	もの黄金の
	かふどう たぼうる	果報を給わる

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ309）

〔訳〕彼女と私が契りを交わした暁は、まるで黄金の果報を頂いたような幸せな気持ちである。

## 第二項 愛の依頼

愛の依頼の歌は①私はあなたの訪れを待っている、②私の心を動かすのはあなただ、③紺染めのように深く染めてください、④一夜の情を心に染めてください、などの心を表現する。自分の意志を表明して、相手の心にはたらきかける点で「告白」に近いが、このばあいは二人の関係がすでに成立した段階にある。関係をよりいっそう深め、より強固なものにするために依頼をするのである。

### ① 私はあなたの訪れを待っている

次の事例は、咲いた花が豊饒を待っているように、私は夜中のあなたの訪れを待っている、というものである。「さとう（里）」は「彼」の意味であるが、呼称としても使用できるので、ここでは間近にいるものとみなして「あなた」と解釈しておく。そう解釈すると依頼の態度が明確になる。

### 〔資料42〕

65 さちやる はなや	咲いた花は
ゆがふどう まちうる	豊年を待っている
ばぬや ゆなかぬ	私は夜中の
さとうどう 待ちうる	あなたを待っている

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ205）

〔訳〕咲いた花は豊饒を待っている。私は夜中のあなたを待っている。

### ② 私の心を動かすのはあなただ

次の事例は、柵の枝は風が動かします、私の心はあなただけが動かします、というものである。前例と同様に「里」を「あなた」と解釈した。

[資料43]

66 しんだんぬ 枝まや	梅檀の枝は
風ぬど うがしょうる	風が動かしなさる
ばぬが 心や	私の心は
里ぬど 動しょうる	彼が動かしなさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ206)

[訳] 梅檀の枝は風が動かします。私の心はあなただけが動かします。

③ 紺染めのように深く染めてください

次の三例は、せっかく染めてくださるのならば、鮮やかな紺染めに、浅染めはよしてください、というものである。宮古の歌謡で恋人のことを「すみゃー(染めた人)」「すまりゃー(染まった人)」というように、染めるは恋愛関係の用語であり、深く染めるということは、深く愛することである。それを依頼しているのである。

[資料44]

18 すみてい すみらば	染めて染めたら
花ぬ 紺染ゆ	花の紺染めを
浅染みや	浅染めは
ゆし給ぼり	よしてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ22)

[訳] せっかく染めてくださるのなら、鮮やかな紺染めに。浅染めはよしてください。

[資料45]

72 しいみてい しいみらば	染めて染めたら
はなぬ くんずみ	花の紺染めを
あさずみや	浅染めは
ゆるしたぼうり	よしてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ212)

[訳] せっかく染めてくださるのなら、鮮やかな紺染めに。浅染めは許して

ください。

[資料46]

1 染みて 染らば	染めて染まるなら
花ぬ 紺地	花の紺地
浅染 やるか	浅染めであれば
許ち 給り	許してください
(作詞 森 時)	

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ137)

[訳] せっかく染めてくださるのなら、鮮やかな紺染めに。浅染めは許してください。

④ 一夜の情を心に染めてください

次の二例は、「一夜の情の花」ということばのなかに、一度限りの二人の交情があらわれている。その匂いを残しておくので心に染めてくださいというのは、匂いを通して相手に思い起こしてもらうためであり、それを依頼しているのである。「愛の始まり」の時点での思いでもあるが、心は依頼することに力点がある。

[資料47]

124 びとうゆぬ なさきぬ	一夜の情けの
花どう やそんが	花であるが
にうい ぬくさば	匂いを残すから
きいむに すみたぼり	心に染めてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ264)

[訳] 一夜の情の花ではあるが、匂いを残しておくので心に染めてください。

[資料48]

165 ゆうなさきぬ はなどう	夜情けの花で
やそんが	あるが
にうい ぬくさば	匂いを残せば
きいむに すめたぼり	胸に染めてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ305)

[訳] 一夜の情の花ではあるが、匂いを残しておくので心に染めてください。

### 第三項 愛の確認

愛の確認の歌は①私の思いはあなたに染まっている、②あなたの情が心から離れない、③心の奥では深くあなたを思っている、④私はあなた一人を愛している、⑤彼女は私に靡いている、⑥愛の指輪が光っている、⑦言葉に愛がこもっている、⑧体の香りが忘れられない、⑨二人は深く染まっている、⑩二人は深く結びついている、⑪二人は心から愛し合っている、⑫二人の間からは風も通らない、⑬並ぶ星は二人のようだ、などの心を表現する。自分の愛を表明するところは「告白」に近いが、このばあいも二人の関係はすでに成立した段階にあり、関係を確認するのが目的である。

#### ① 私の思いはあなたに染まっている

次の事例は、川の水が海に溜まるように、私の思いはあなただけに染まっている、というものであり、私はあなただけを愛していると告げることで二人の愛の確認をしているのである。上句で物事の道理を説いてそれと同じ心を下句に託して相手の同意を求める論法は、求愛の歌にもあるが、この事例は、相手の同意を求めることよりも自分の思いを告げることにより力点を置いているので、愛の確認の歌と解釈したほうがよいのではないか。

#### [資料49]

48 かーらぬ みじいや	川原の水は
いんにどう たまる	海にたまる
ばぬが うむいや	私の思いは
うらにどう すまる	あなたに染まる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ188)

[訳] 川の水は海に溜まる。私の思いはあなただけに染まる。

② あなたの情が心から離れない

次の事例は、愛しい女の心に思いが染まって、情の数々が胸から離せない、というものである。愛の確認をしていることは確かであるが、「かぬしゃ」を「愛しい女」と解釈するか、目の前にいる「あなた」と解釈するかで、確認の仕方が微妙に異なる。相手を想像して自分の心を確認しているか、眼前の相手に語りかけて相互に確認しようとはたらしかかっているのかという差異がある。

[資料50]

38 かぬしゃ きいむに	愛しの胸に
うむい すまり	思い染まり
なさきぬ かじいかじい	情けのかずかず
んにから はなさるぬ	胸から離せない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ178)

[訳] 愛しい女の心に思いが染まってしまい、情の数々が胸から離せない。

③ 心の奥では深くあなたを思っている

次の三例は、表面は愛していないように見えるかもしれないが、心の底ではあなたを愛している、というものであり、相手の疑いを晴らすかたちで愛の確認をしている。三番目の事例の下句「ばぬが情きや肝ど情き（私の情は心が情だ）」は、しぐさや表情にはあらわれていないかもしれないが、心の中では深く思っているということであろうか。

[資料51]

23 情 ねぬで 思いひな	情けがないと思ってくれるな
みやらび	乙女
ばが 肝にや いかふどう	私の胸には如何ほど
思いうりゃどう	思っておればぞ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ27)

[訳] 情がないと思ってくれるな、乙女よ。私の心ははかりしれぬほど思っているよ。

[資料52]

99 なさき ねーぬで 情けがないと  
うむいひーな みやらび 思ってくれるな乙女  
ばぬが きむや 私の心は  
いかふどう うむいうりゃどう 如何ほど思っているから

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ239)

[訳] 情がないと思ってくれるな、乙女よ。私の心ははかりしれぬほど思っているよ。

[資料53]

98 情き ねーぬで 情けがないと  
思いや 変るなよ 思いは変わるなよ  
ばぬが 情きや 私の情けは  
肝ど 情き 心が情け

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ238)

[訳] 情がないといって思いは変わるなよ。私の情は心が情だ。

④ 私はあなた一人を愛している

次の事例は、私は二心を持っていない、あなただけを愛していると告げることで、愛を確認している。

[資料54]

2 たい むちゆる ふたり (の彼を) もつ  
わんや あらぬ 私ではない  
ゆくぬ ちむ むつ 別の心をもつ  
くりや あらん 私ではない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ52)

[訳] 二人の彼を持つ私ではない。別の心を持つ私ではない。

次の二例は、花でさえすべての枝に咲くのではなく、情のある枝に咲くものだ、と表面は植物の花と枝の関係を表現しているが、裏の意味は、花が枝

を選ぶように、私もあなた一人だけの愛を頼りにしている、というかたちで愛を確認している。

[資料55]

117 はなやらばん	花であっても
ゆだかーずんが さかぬ	枝ごとには咲かない
なさき ある ゆだどう	情けのある枝を
たゆり さちゆる	頼って咲く

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ257)

[訳] 花であってもすべての枝に咲くのではない。情のある枝を頼って咲くのです。

[資料56]

9 花 やらばん	花でさえ
枝数んが 咲かぬ	枝ごとには咲かない
情 ある 枝どう	情けある枝こそ
たゆり 咲ちゆる	頼りを頼って咲くのです

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ13)

[訳] 花であってもすべての枝に咲くのではない。情のある枝を頼って咲くのです。

⑤ 彼女は私に靡いている

次の事例は、ユウナの花が風の吹くままに揉まれているように、愛しい女は私の思うままに揉まれている、というものである。自分に靡いている相手に愛を感じているのである。

[資料57]

166 ゆうなぬ 花や	ユウナの花は
風 まま むまれ	風の(吹く)ままにもまれ
かぬしゃま 花や	愛しの花は
ばぬ まま むみ むまれ	私の(気持ちの)ままにもみもま

れてください



〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ306〕

〔訳〕ユウナの花は風の吹くままに揉まれている。愛しい女の花は私の思うままに揉み揉まれている。

⑥ 愛の指輪が光っている

次の二例は、愛する男（びらま）からもらった指輪の光に相手の愛を感じている。

〔資料58〕

130 びらま なさきぬ	愛しい人の情けの
くんがにぬ うびんがに	黄金の指輪
さしば さす ふどう	指せば指すほど
ぴいかるいどう まさる	光がまさる

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ270〕

〔訳〕愛しい男の情のこもった黄金の指輪、指せば指すほど光がまさってくる。

〔資料59〕

2 びらま 情ぬ	いとしい男の情けの（こもった）
かたみぬ 指金や	形見の指輪は
さしば さす ふど	差せば差すほど
光や まさりど し	光は勝る

（作詞 米盛太郎）

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ124〕

〔訳〕愛しい男の情のこもった指輪は、指せば指すほど光がまさってくる。

⑦ 言葉に愛がこもっている

次の二例は、相手の言葉に愛を感じとっている。前の例は、男の情は言葉にある、後の例は、情のない人だと思っていたが話された言葉のなかに情を思い知った、というものである。

[資料60]

22 びらま 情で	愛しい人の情けとして
なゆんざんどう ありやら一	何一つさえあろうかなあ
いぜりい 言葉どう	言った言葉が
情で 思いうりい	情けと思っている

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ26)

[訳] 愛しい男の情はどんなものだろうか。言った言葉が情だと思っている。

[資料61]

100 情 ねーぬでど	情けがないと
ばな 思いうだるよう	私は思っていたよ
いぢへる 言葉に	言った言葉に
情ば 残り	情けが残り

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ240)

[訳] 情のない人だと私は思っていたよ。だが言った言葉に情が残っていた。

次の二例も、前例と同様に、相手の言葉に愛を感じているが、それが年を経るほどに勝っていく、というかたちで愛を確認しているのである。なお、前者の例の「とうしゆ いく ふどう」を『南島歌謡大成IV八重山篇』は「年をとるほど」と訳しているが、そのように解釈すれば、「年齢がかさむにつれて」という意味になり、この事例は「懐旧の歌（昔の恋）」に分類される。後者の例の「年ぬ いく ふど」を「年がいくほど」と『南島歌謡大成IV八重山篇』が訳しているように、この二例は「年を経るにつれて」と解釈すべきであろう。そうであれば、相手の言葉に深い愛を感じ取った時点からそう長くない年数ということになり、愛の持続を確認する歌となる。

[資料62]

97 情ぬ 言葉や	情けの言葉は
きいむに うむいすまり	胸に思い染まり
とうしゆ いく ふどう	年をとるほど

うむい まさる

思いはまさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ237)

[訳] 情の言葉は心に思い染まってしまい、年を経るほど思いが勝っていく。

[資料63]

34 うんぬ 一声	その時の一声が
ぬちじゅうぬ 思いむぬ	一生の思いもの
年ぬ いく ふど	年がいくほど
思いど まさる	思いがまさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ174)

[訳] その一声が一生の喜びとなっている。年を経るほど思いが勝っていく。

⑧ 体の香りが忘れられない

次の二例は、愛しい男の肌の香りがいつまでも心に染まって忘れられない、  
というかたちで、相手への愛を確認している。

[資料64]

1 とばら一ま 肌ぬ 香ばさ	愛しい人の肌の香りが
何日までん	いつまでも
肝に 染まり	心に染まり
胸から 下るさるぬ	胸からおろせない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ103)

[訳] 愛しい男の肌の香りがいつまでも心に染まって胸から降ろせない。

[資料65]

1 とばら一ま 肌ぬ 香ばさや	愛しい人の肌の香りは
何日までん	いつまでも
肝に 染まり	心に染まり
胸から うるさらぬ	忘れることができない
(山 一枝)	

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ116)

[訳] 愛しい男の肌の香りがいつまでも心に染まって胸から降ろせない。

宮古のトーガニには、どんなに水を浴びても体に染まった香りが抜け落ちないことを誇張的に表現したものがある。心から離れないばかりでなく、体に染みついて離れないのである。身体的な表現は、概してトゥバラーマよりもトーガニのほうが強い。

あさかぬ みぢゆ 親井川の水を	
いらよー かなしゃよー	ねえ 恋人よ
ちむぬ シリイきゃー	心〈満足〉がゆくまで
あみりばまい	浴びても
っづあが かじゃぬ	お前の香りは
かなしゃが かじゃぬゆ	可愛い者の香りは
んぎていや にゃーん	脱げるものではないよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ20」)

[訳] 早朝の澄んだ井戸水を、ねえ愛しい人よ、心ゆくまで浴びても、あなたの香りが、愛しい人の香りが落ちることはないよ。

⑨ 二人は深く染まっている

次の二例は、紺染め（花染め）の手拭いは藍で染めるように、あなたと私とは心で染める、というかたちで、二人の愛を確認している。

[資料66]

62 くんずみていさじや	紺染めの手拭いは
あいしどう すみる	藍で染める
うらとう ばんとうや	あなたと私とは
肝しどう すみる	心で染める

(『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トゥバラーマ202)

[訳] 紺染めの手拭いは藍で染める。あなたと私とは心で染める。

[資料67]

2 花染手さじや	花染め手拭いは
あいしど 染みる	藍で染める
うらと ばぬとや	あなたと私は

肝しど 染みる  
(作詞 森 時)

心で染める

『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ138)

[訳] 花染めの手拭いは藍で染める。あなたと私とは心で染める。

⑩ 二人は深く結びついている

次の事例は、三線の糸掛けが弦を掛けて互いに結びついているように、私と愛しい人は縁で結びついている、というかたちで、二人の愛を確認している。

[資料68]

1 三味線ぬ 糸かきや	三味線の糸掛けは
絃しど かきら	弦に掛けるね
我ぬと かぬしやや	私と愛しい人は
縁しど 結ぶ	縁でぞ結ぶ

『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ85)

[訳] 三線の糸掛けは弦で掛ける。私と愛しい人は縁で結んでいる。

⑪ 二人は心から愛し合っている

次の事例は、愛しい男の情は言葉が情である、愛しい女の情は心が情である、というかたちで、二人の愛を確認している。一般論として愛の道理を説いているのではなく、「男は言葉で」「女は心で」愛を表現するものだという規範をふまえて、それぞれの立場からの、愛のかたちを確認しているであろう。

[資料69]

129 びらま 情や	愛する人の情けは
言葉どう 情	言葉が情け
かぬしやま 情や	愛しい人の情けは
心ど 情	心が情け

『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ269)

[訳] 愛しい男の情は言葉が情である。愛しい女の情は心が情である。

⑫ 二人の間からは風も通らない

次の事例は、私達二人の真ん中からは夏の南風さえもするすると吹き通らない、そんな仲でいたいね、というものである。いわゆる「水も洩らさぬ仲」のように、密着した心を強調することで二人の愛を確認している。

[資料70]

ばがだ一 ふたーりいぬ	私達ふたりの
まんなかからや	真ん中からは
なついぬ ばいぬ かぜーまんざん	夏の南の風さえも
するする ふきるなよう	するすると吹きこぼれるなよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ53)

[訳] 私達二人の真ん中からは、夏の南風さえもするすると吹き通らない、そんな仲でいたいね。

宮古のトーガニにも類例がある。

つヴあとう ばんとうが	あなたと私の
ばしがまから ヨー	間からは、
みずいがまやつム	水さえも
ふきんが しゃく ヨー	漏らないほどに、
たぐぬ ふりだき	桶のように
あやみや にゃーだ	割れ目がないように、
うかりや うらでい	抱き合っていますよ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」13)

⑬ 並ぶ星は二人のようだ

次の事例は、南の星が並んでいるのを見ると、愛しい人と私が語り合って坐っているようだ、と二人の仲の良さを確認している。二つのものが並んでいる情景を二人の関係に結びつけたがる心である。

[資料71]

106 はいが ぶしいぬ 南の星が  
ならびすゆ みるか 並んでいるのを見ると  
かぬしゃとう ばぬとう 愛しい人と私が  
かたらい びるすんや 語りあって座っているように（見える）  
（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トゥバラーマ246）

[訳] 南の星が並んでいるのを見ると、愛しい人と私が語り合って坐っているようだ。

類歌が宮古のトーガニにもある。二つ並んでいるのは、トーガニでは南の星ではなく、離れ岩である。

ぬぎきかい いきがちな 野崎に行きながら  
ふたちばなりう みあぎりばどうよ 二つ離れを見上げたところ  
うヴあとう ばんとうが お前とわたしと  
まうきゃどうり びじういにゃんゆ 向かい合って座っているようだよ  
（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ83」）

#### 第四項 愛の不変

愛の不変の歌は①松の葉のようにいつまでもいっしょ、②あの世までいっしょ、③いつまでもいっしょ、④思いが変わるな、⑤結んだ縁を生涯離さない、などの心を表現する。二人の愛が不変であることを確認したり、願望したり、誓約したりするもので、愛の不変を主題にするグループとしてまとめておくことにする。

##### ① 松の葉のようにいつまでもいっしょ

次の四例は、あなたと私との思いは、いつも変わらない松の葉のようだ、というものである。松の葉は枯れ落ちてでも互いに離れることがないので、それに喩えて二人の愛の不変を確認している。不変の愛を松の葉に喩える表現は琉歌に類例がある。「替るなやう 互に 結て 有る 契り 松の 葉の 心 あの世界も（二人が結んである契りは永久に変わらないようにしてく

れ。松の葉のようにあの世までも。）」(『琉歌百控』578)。

[資料72]

28 うらと ばぬとぬ	あなたと私との
思いやよー めるび	思いはね 乙女
何時ん 変らぬ	いつも変わらない
松ぬ 葉ぬ 心	松の葉のようだ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ168)

[訳] あなたと私との思いは、乙女よ、いつも変わらない松の葉のようだね。  
また、宮古のトーガニにも類例がある。

まついぎーが ばーや	松の木の葉は
すんざな むぬ	うらやましいものだ。
かりうていイきゃーまい	枯れ落ちるまでも、
まヴきゃどうり ヨイ	おたがいいっしょだ。
つヴぁとう ばんとうや	あなたと私は
すいにうしイきゃがみ	死んでしまうまで、
まヴきゃどうり ヨイ	おたがいいっしょだ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」6)

[資料73]

2 かぬしゃまと 我ぬとぬ	いとしい女と私との
思いや	思いは
いちん 変らぬ	いつも変わらない
松ぬ 葉ぬ 心	松の葉の心である

(作詞 仲宗根長一)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ126)

[訳] 愛しい女と私との思いはいつも変わらない松の葉のようだ。

[資料74]

43 かぬしゃまとう ばぬとうぬ	愛しい人と私との
うむいや	思いは



いついん かわらぬ                      いつも変わらぬ  
まちいぬ はぬ ぐとう                  松の葉のよう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ183)

[訳] 愛しい女と私との思いはいつも変わらない松の葉のようだ。

[資料75]

44 かぬしゃまと ばんとぬ              愛しい人と私との  
    思いやよー                              思いはね  
    いちん かわらぬ                      いつも変わらぬ  
    松ぬ 葉ぬ 心                          松の葉のよう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ184)

[訳] 愛しい女と私との思いはいつも変わらない松の葉のようだ。

次の事例も、松の葉に喩えて愛の不変性を願っている。

[資料76]

2 結すべる 縁や                              結んだ縁は  
    松ぬ 葉ぬ 心                              松の葉の心  
    情ぬ 言葉や                              情けの言葉は  
    幾世までん                                幾世までも

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ86)

[訳] 結んだ縁は松の葉のように。情の言葉は幾世までも。

② あの世までいっしょ

次の事例は、今の愛の言葉を忘れないで、あの世までも同じ道を踏みましよう、というかたちで、愛の不変を誓い合っている。

[資料77]

103 なまぬ くとうばや                      今の言葉は  
    きいむから うらしょんなよ              胸からおろしなざるなよ  
    かぬゆまでいん                          あの世までも  
    ぴとうみちい ふみおうら              一道を踏みましよう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ243)

[訳] 今の言葉は心から降ろさないでください、あの世までも一道を踏んでいきましょう。

③ いつまでもいっしょ

次の事例は、あなたと私とはいつまでもいっしょだと語り合った、というかたちで愛の不変を確認している。

[資料78]

31 うらとう	ばぬとうや	あなたと私とは
なゆでどう	かたろうだ	何と語り合った
いちいちまでいん		いついつまでも
ままでどう	かたろうだ	一緒だと語り合った

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ171)

[訳] あなたと私とは何と語り合った。いついつまでも一緒だと語り合った。

④ 思いが変わるな

次の事例は、あなたと私とは、互いに愛し合って、いつまでも変わらないようにしよう、というかたちで、愛の不変を誓い合っている。

[資料79]

30 うらと	ばんとや	あなたと私とは		
うら	うむい	ば	うむい	あなたを思い私を思い
いく世までん		幾世までも		
かわるなよー	かぬし	変わるなね	愛しい人	

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ170)

[訳] あなたと私とは、あなたを思い私を思い、幾世までも変わるなよ、愛しい人よ。

次の事例は、月と太陽が同じ道を通るように、あなたの心も私と同じ道を通ってください、というかたちで、相手の愛の不変を依頼している。なお、

「とうばら一ま」を「あなた」と解釈したが、そうすると、呼びかけられた相手は目の前にいることになる。もし、眼前ではなく、想像のなかにいるとすれば、愛の不変を依頼したり念押ししたるのではなく、一人胸中で願望している意となる。

[資料80]

75 ちいきいとう ていだとうや 月と太陽は  
ゆぬ みちいどう とうーりょうる 同じ道を通りなさる  
とうばら一ま くくるん トゥバラーマ心も  
びとうみちい ありたぼうり ひとつであってください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ215)

[訳] 月と太陽は同じ道を通ります。あなたの心も私と一つの道であってください。

⑤ 結んだ縁を生涯離さない

次の事例は、纏れた糸は切って離せるが、結んだ縁は一生離せない、というかたちで、二人の絆の固さを強調している。

[資料81]

155 むつれる 糸や もつれた糸は  
切しん ばなさりん 切ってでも離される  
むすべる 縁や 結んだ縁は  
ぬちじゅう ばなさるぬ 一生離せない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ295)

[訳] 纏れた糸は切って離すことができる。結んだ縁は一生離すことができない。

宮古のトーガニにも類歌がある。

29 ふふうかにばすの つつってんまいよ 鉄線が切れても  
なない むで てがに一 七重にまがる指輪でさえも  
つりいのつとむまいよ 切れ離れても

うわと ばんとが  
むすぶうつ いんな  
つりいや のかんよ

君と僕とは  
結んである縁は  
切れて離れることはないよ

(『伊良部村史』)

## 第二節 愛の葛藤

関係が成立している状況にあっても、恋愛をめぐる問題は複雑であり、平穏な状態よりもむしろ葛藤状態におかれることが多い。琉歌ではこの領域を表現した歌が数多くみられるが、トゥバラーマやトーガニは意外と少ない。トゥバラーマでは(1)愛を疑う、(2)破綻の恐れを歌ったものがあるだけである。

### 第一項 愛を疑う

愛を疑う歌は、約束をたがえて訪れなかった相手を責める心を表現する。

#### ① なぜ来なかったの

次の事例は、昨夜はどうしておいでにならなかったのか、と相手が約束をたがえて訪れなかったことを責めている。訪れなかった理由を問い詰める心のなかには、相手の愛の薄れを疑う気持ちが入っているのであろう。

#### [資料82]

- |   |                            |                              |
|---|----------------------------|------------------------------|
| 1 | ゆびが 夜や<br>のうでどう<br>おうらな一だは | ゆうべの夜は<br>どうして<br>おいでにならなかった |
| 2 | ゆさる夜や<br>いかでどう<br>おうらな一だは  | 昨夜は<br>如何なるわけで<br>おいでにならなかった |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ1)

[訳] 昨夜はどうしておいでにならなかったのか。昨夜は如何なるわけでおいでにならなかったのか。

## 第二項 破綻の恐れ

愛の破綻を恐れる歌は、島が隔てても心は離れないでください、という心を表現する。なお、この事例は「葬儀の歌」の可能性もある。

### ① 心は離れないでください

次の事例は、現在いる島は互いに離れているが、心だけは離れないでください、と相手に懇願している。容易に通えない離れた場所にいるために疎遠になりはしないかという心配が兆しているのであろう。

#### [資料83]

2 島ぬ ぬきや	島の別れは
なる程 ぬけうそんが	なるほど別れているが
肝ぬ ぬきや	心の別れは
たんで ぬけたぼんな	どうぞ別れてくださるな

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ70)

[訳] 島の離れは、なるほど離れているが、心の離れは、どうか離れないでください。

次の二例も、海と山で隔てられていることから、心の離れを恐れている。客観的な事情として海と山に隔てられているのはしかたないことであるが、心の繋がりは離れてほしくない、という願望の意。

#### [資料84]

70 島ぬ ひだみや	島の隔ては
海と 山と	海と山と
肝ぬ ぬけや	心の隔ては
たんでい ぬけひるな	どうか隔てくれるな

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ210)

[訳] 島の隔ては、海と山である。心の離れは、どうか離れないでください。

次の歌の類歌が与那国のスンカニにあり、「葬式の歌」となっている。両

者の内容は、ほとんど類似しているが、「隔て」の意味が、愛の歌では生別であり、葬式の歌では死別である点に大きな差が生じている。歌の機能する場面の差異が歌の解釈に大きな影響をあたえる典型的な事例である。あるいはトゥバラマの事例も葬式の歌と理解すべきだろうか。ただしトゥバラマには、不祝儀の歌が一例しかない（この歌の類歌もスンカニでは「葬式の歌」となっている）。葬式の歌は離別の恋歌と内容的に近い関係にある。離別の恋歌から葬式の歌に転用されたのであろうか。

[資料85]

1 島ぬ びだみや	島のへだては
海と 山と	海と山と
我けら びだみや	私達のへだては
あらしたぼんな	あらせてくださるな

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラマ69)

[訳] 島の隔ては、海と山である。私達の隔ては、ないようにしてください。

ドゥナンズンカニの「葬式の歌」

21 ちまぬ ひだていや	島の隔ては
うみとう やまとう	海と山とであり
んだとう ばみ ながや	あなたと私の仲は
ひだてい たぶな	隔ててくださるな

(『南島歌謡大成IV八重山篇』)

### 第三節 一時的な離別

一時的な離別の歌は、(1)離れている、(2)通う、(3)待つ、(4)会う、(5)離れていく、などの局面の心を表現するが、これらはさらに微細な部分に区分される。一時的な離別の状況にあるときは、「愛の葛藤」の歌と同様に否定的な感情を表現することが多い。

## 第一項 離れている局面

二人が離れている局面の歌は、(1)離れている辛さ、(2)相手を偲ぶ、(3)相手を思い出す、(4)恋しさが増す、(5)伝言したい、などの心を表現する。さらに、(1)離れている辛さは①会いたくて苦しい、②会うすべがない、③会えなくて心がたぎる、④会えないでいる時間が長く感じられる、⑤会って語り合いたい、などの心を表現する。(2)相手を偲ぶは、月・太陽・雲・夢・面影などを通して相手の姿を偲ぶ心を表現する。(3)相手を思い出すは①愛の形見から思い出す、②千鳥の声で思い出す、などの心を表現する。(4)恋しさが増すは、夢を見た風が吹く夜などに相手を恋しく思ったりする心を表現する。(5)伝言したいは、鳥や風を頼りにして互いに伝言したい心を表現する。

### (1) 離れている辛さ

離れている辛さの歌は①会いたくて苦しい、②会うすべがない、③会えなくて心がたぎる、④会えないでいる時間が長く感じられる、⑤会って語り合いたい、などの心を表現する。

#### ① 会いたくて苦しい

次の事例は、あなたを見たさに心に色濃く染まって、胸の煙がとても苦しい、と離れている辛さ、会いたがっている心を表現している。

[資料86]

32 うらゆ みぶしゃ	あなたを見たく
きむに くんすまり	胸に色染まり
んにきぶし	胸の煙は
くりしゃ ありうる	苦しくある

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ172)

[訳] あなたを見たさに心に色濃く染まって、胸の煙がとても苦しい。

#### ② 会うすべがない

次の事例は、見ようとすれば海山が隔て、行こうとすれば自由にならな

い、と会うすべのない辛さを表現している。二人を隔てているのが海や山であること、往来が不自由であることなどに〈旅の歌〉的要素がみられるが、トゥバラーマでは典型的な旅の歌は後にあげる一例しかないので、この歌は遠隔恋愛と解釈しておく。

[資料87]

145	みらで	しば	見ようとすれば
	うみやま	ひだてい	海山が隔て
	ばらでしば		行こうとすれば
	じゆうや	ならぬ	自由はできない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ285)

[訳] 見ようとすれば海山が隔て、行こうとすれば自由にならない。

旅歌の事例。

73	たびぬ	うむいや	旅の思いは	
	ばなー	にばるぬよう	私は寝られぬよ	
	かぬしゃ	くとう	うむい	愛しい人のことを思い
	ゆば	あかし	夜を明かした	

(『南島歌謡大成IV八重山篇』)

③ 会えなくて心がたぎる

次の事例は、会いたくて焦がれているのは私も同じことだ、心がたぎってじっとしてられない、と会えずにいる焦燥感を表現している。後に例示する、八重山の節歌「いやり節」の一節をふまえたものであろう。

[資料88]

17	うがんぶしゃ	拝みたい		
	うらきらさすや	あなたに会いたいの		
	ばぬ やりん	ゆぬむね	私も同じこと	
	きいむ	たいり	うらるぬ	心がたぎって<しっとして>おること



ができない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ157)

[訳] 会いたくて焦がれているのは私も同じことだ。心がたぎってじっとしてられない。

「いやり節」

- |   |        |         |                   |
|---|--------|---------|-------------------|
| 2 | 親たうらに  | しされて    | 親様に申しあげて          |
|   | しゆたうらに | しされて    | お父様に申しあげて         |
|   | 拝むぶしや  |         | 拝みたく              |
|   | おらけらしや | 有通し     | 心切なくありつづけ         |
| 3 | たてれはん  | もの ないらぬ | 譬えるにも (譬える) ものがない |
|   | ほらびれはん | こと ないらぬ | 比べるにも (比べる) 言がない  |
|   | きも     | 絶て      | 心は絶えて             |
|   | むねきぶり  | 立通し     | 胸は煙が立ちつづけ         |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』「節歌」4)

④ 会えないでいる時間が長く感じられる

次の事例は、一夜見なければ一月のように思われ、一日見なければ百日のように思われる、と会えないでいる時間が長く感じられる心を表現している。

[資料89]

- |     |     |      |                |
|-----|-----|------|----------------|
| 123 | 一夜  | 見ゆばな | 一夜見なければ        |
|     | 一月で | 思ふれ  | 一月も逢わないように思われ  |
|     | 一日  | 見ゆな一 | 一日見なければ        |
|     | 百日で | 思ふれ  | 百日も逢わないように思われる |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ263)

[訳] 一夜見なければ一月のように思われ、一日見なければ百日のように思われる。

⑤ 会って語り合いたい

次の事例は、心に染まっている数々の思い、愛しい女を迎えて早く語れたら、とはやる思いを表現している。

[資料90]

53 肝に 染まりる	胸にそまる
数々ぬ 思い	かずつの思い
かぬしゃま 迎かやり	愛しい人を迎えて
早しゃ 語るらば	はやく語れたなら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ193)

[訳] 心に染まっている数々の思い、早く愛しい女を迎えて語ることができたらいいのに。

(2) 相手を偲ぶ

相手を偲ぶ歌は、月・太陽・雲・夢・面影などを通して相手の姿を偲ぶ心を表現する。

① 愛しい女の姿を偲ぶ

次の二例は、清か照る月よ、鏡になってください、私の愛しい女を映して見せてください、と会うすべがないので、せめて月に彼女の顔を映し出して眺めたい心を表現している。月がその明るさから鏡の機能を果たすことは琉歌にも数多く表現されている。「のよで まま ならぬ さとまへ かげ うつち わ きも あまがしゆが つきの かがみ (どうして思うままにならぬ恋人の姿を映して、私の心を乱すのであろう、月の鏡は。)」(『古今琉歌集』698)。

[資料91]

64 さゆか ている ちいきい	明るく照る月よ
かがん なりたぼり	鏡になって下さい
ばんが かぬしゃま	私の愛しい人を
写し 見せたぼり	写して見せて下さい

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ204）

〔訳〕 清か照る月よ、鏡になってください。私の愛しい女を映して見せてください。

〔資料92〕

78	ちきぬ ひかりんが	月の光に
	うむかぎ うつし	面影をうつし
	かぬしゃま 姿ぬ	愛しい人の姿が
	しくしく 思りそう	たいそう思われるよ

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ218）

〔訳〕 月の光に面影を映し出している。愛しい女の姿がいつそう偲ばれるよ。

## ② 太陽と雲をよすがに偲ぶ

次の事例は、上がる太陽は私とと思ってください、かかる雲はあなたとっています、と互いに太陽と雲をよすがにして偲ぶ心を表現している。琉歌では、雲は月などを隠すものであるが、雲が相手を偲ぶよすがとなるという発想は「まざかい節」や「川原山節」などに見られる。八重山の伝統的な表現をふまえたものであろう。なお、『南島歌謡大成IV八重山篇』が「里」を「私」と訳しているのは単純なミスであろう。

〔資料93〕

1	揚がる 太陽や	揚がる太陽は
	我で 思いたぼうらり	私とと思ってください
	かかる 雲や	かかる雲は
	里で 思いうんど	私とと思ってください

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ101）

〔訳〕 上がる太陽は私だと思ってください。掛かる雲はあなただと思っています。

③ 夢で偲ぶ

次の事例は、自分の見た夢を愛しい女に見せたい、と夢で相手と交信したい心を表現している。

[資料94]

132 深さ うむいどう	深く思えば
いみん みらり	夢にも見える
なまぬ 夢ゆ	今の夢を
かぬしゃん みしらるば	愛しい人に見せられたら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ272)

[訳] 深く思っているので夢で見ることができるのです。今の夢を愛しい女に見せることができたらいいのに。

次の事例は、深く思っているので夢で見ることができるのです、今の夢をもう一度見ることができたらいいのに、と夢でなりと相手を偲ぶ心を表現している。琉歌にも類例がある。「きもの ぐわん たてて まどろまば いめに わが おめの わらべ みせて たばうれ (心の中で願立てをするから、まどろみの夢の中で私の愛しい乙女を見せて下さい。)」(『天理本琉歌集』684)。

[資料95]

131 ふかさ うむいどう	深く思えば
いみん みらり	夢にも見える
なまぬ いみぬ	今の夢が
またん みらるばら一	又も見えたらなあ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ271)

[訳] 深く思っているので夢で見ることができるのです。今の夢をもう一度見ることができたらいいのにね。

④ 面影で偲ぶ

次の二例は、面影が立ったなら噂をしていると思ってください、夢に見えたなら泣いていると思ってください、と会えずにいる心を表現している。夢を偲ぶ手段としている点は、前例と同様であるが、それは泣き暮らしている自分のを思いを伝えるためである。琉歌にも類例がある。「おもかげの たたば さたよ しゆん ともれ いめ しげく ならば なきゆん ともれ (面影が立てば沙汰をしていると思い、夢が繁くなれば泣いていると思って下さい。)」(『古今琉歌集』512)。

[資料96]

19 うむかぎぬ たたば	面影が立ったなら
さた すんで うむいよりよ	噂をしていると思って下さい
いみぬ みらるば	夢を見たなら
なきうんで うむいよりよ	泣いていると思って下さい

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ159)

[訳] 面影が立ったなら噂をしていると思ってくださいね。夢に見えたなら泣いていると思ってくださいね。

[資料97]

7 面影ぬ 立たば	面影が立てば
沙汰 すんで 思いうりよ	噂をしていると思っておくれよ
夢ぬ 見らるば	夢が見られたら
泣きうんで 思よりよ	泣いていると思いなさいよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ11)

[訳] 面影が立ったなら噂をしていると思ってくださいね。夢に見えたなら泣いていると思ってくださいね。

次の事例は、思ったら面影が立たないかなあ、思ったら寄って来ないかなあ、と強く思うことで会うことができないうかというかすかな期待を表現している。「肝ゆうらば」の意未詳。「思ふ」の類語で「きもふ(肝ふ)」のような動詞があるのだろうか。

[資料98]

2 思むゆらば	思ったら
面影 立つあぬかや	面影が立たないかなあ
肝ゆうらば	思ったら
ゆうり来ぬかや	寄って来ないかなあ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ98)

[訳] 思ったら面影が立たないかなあ。思ったら寄って来ないかなあ。

(3) 相手を思い出す

相手を思い出すは①愛の形見で思い出す、②千鳥の声で思い出す、などの心を表現する。

① 愛の形見で思い出す

次の三例は、衣装箱の底から花染めの手拭いを出して、匂いを嗅いで愛しい女を思い出している、と手拭いをきっかけに相手を偲ぶ心を表現している。

[資料99]

36 かいぬ 底から	衣笥の底から
花染手さじば	花染めの手拭いを
いだし かざば し	出し匂いをし
みやらび うむいだし	乙女を思い出し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ176)

[訳] 衣装箱の底から花染めの手拭いを出して、匂いを嗅いで乙女を思い出している。

[資料100]

35 かいぬ 底から	衣笥の底から
花染み手さじば	花染めの手拭いを
いだし かざば し	出し匂いをし
かぬしゃま 思い出し	愛しい人を思い出し

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ175〕

〔訳〕 衣装箱の底から花染めの手拭いを出して、匂いを嗅いで愛しい女を思い出している。

〔資料101〕

1	かいぬ 底から	衣筒から
	花染手拭ば 出だし	花染め手拭いを取り出し
	香ばし かぬしゃま	(それを) 嗅いでいとしい女のこゝを
	思い出し	思い出し
	(作詞 米盛太郎)	

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ123〕

〔訳〕 衣装箱の底から花染めの手拭いを出して、匂いを嗅いで愛しい女を思い出している。

② 千鳥の声で思い出す

次の事例は、浜千鳥の鳴く声を聞くと愛しい女のことを思い出される、と悲しい浜千鳥の鳴き声をきっかけに相手を偲ぶ心を表現している。琉歌で浜千鳥は寂しさを喚起する景物であり、恋歌で相手を思い出すきっかけになる。「たんで はまちどり あさゆ なち くいなるな きけば おもかげの まさて たちゆさ (どうか浜千鳥よ、朝夕鳴いてくれるな。聞くと面影が立ちまさってくるから。)」(『琉歌百控』753)。

〔資料102〕

2	浜千鳥ぬ	浜千鳥の
	鳴く 声 聞きば	鳴く声を聞けば
	かぬしゃま 事ぬ	愛しい人のこゝが
	思うり	思われる

〔『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ72〕

〔訳〕 浜千鳥の鳴く声を聞くと愛しい女のことを思い出される。

(4) 恋しさが増す

恋しさが増すは、夢を見たり風が吹いたりする夜などに相手を恋しく思う心を表現する。

① 共寝の夢が覚める

次の事例は、夢を見て寝床を探り、飛び起きて枕を抱きかかえてしまった、というものである。共寝の夢が覚めて恋しさがいよいよ増している感情を表現している。

[資料103]

21 夢ば 見や	夢を見て
しいきいにはば かいさぐり	寝床をかい探り
とうぶげ 起け一	飛び起きて
枕ば かい抱き	枕をかい抱き

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ25)

[訳] 夢を見て寝床を探り、飛び起きて枕を抱きかかえてしまった。

② 風をよすがに恋しさが増す

次の三例は、北風が吹く夜は愛しい人のことを思っている、涼風の吹くほど思いは勝ってくる、というものである。寒い風から涼しい風に移り変わるにつれ、ますます恋しさが増す心を表現している。北風が吹く寒いときに恋人を思うのは恋歌の類型である。琉歌には「新にし ふく かせの身に せめて ふけは つめて 思まさる さとか おそは (新北風が身にしみて吹きつれば、いよいよ恋人のおそばが恋しく思われる。)」(『古今琉歌集』672)とある。ただし、涼風が吹くほど思いがまさるという発想はトウバラーマ独特のものである。

[資料104]

105 北風 吹く 夜や	北風が吹く夜は
かぬしゃま こと 思い	愛しい人のこと思い
びら風 たつ 程	涼風が吹くほど



思いど まさる

思いはまさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ245)

[訳] 北風が吹く夜は愛しい人のことを思っている。涼風の吹くほど思いは勝ってくる。

[資料105]

144 みーにしい ふく ゆうや

新北風吹く夜は

かぬしゃま くと ういうい

愛しい人のことを思い

びらかじい たつ ふどう

涼風のたつほど

うむいどう まさる

思いがまさる

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ284)

[訳] 新北風が吹く夜は愛しい人のことを思っている。涼風の吹くほど思いは勝ってくる。

[資料106]

1 新北風 吹く 夜や

北風が吹く夜は

かぬしゃま くと 思い

愛しい者のことを思い

びら風 たつ ふどう

ピラ風が吹けば吹くほど

思いど まさる

思いがまさる

(潮平寛保)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ115)

[訳] 新北風が吹く夜は愛しい人のことを思っている。涼風の吹くほど思いは勝ってくる。

(5) 伝言したい

伝言したいは、鳥や風を頼りにして互いに伝言したい心を表現する。また声が届かないことを嘆く歌もある。

① 鳥に伝言を頼みたい

次の事例は、飛ぶ鳥が物言うものであれば、愛しい乙女に伝言を持たせられるものならば、というものである。鳥に託してでも伝言したいが、そ

れも適わぬことと、やや諦めの気持ちと辛さを表現している。「風が物を言う」というのは琉歌にもあるが、「鳥が物を言う」という表現はこの歌独特のものである。

[資料107]

2 とぶ とりぬ	飛ぶ鳥が
むぬ いず 者 やらば	もの言うものであれば
かなし みやらびに	いとしい乙女に
いやい むたさるば	伝言を頼むものを
(作詞 多宇 正)	

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ134)

[訳] 飛ぶ鳥が物を言うものであれば。愛しい乙女に伝言を持たせることができるものならば。

次の事例も、飛ぶ鳥に便りを持たせてほしい、ということで前例と同様であるが、こちらは便りを待っているがわの歌である。

[資料108]

147 みやらび くくるぬ	乙女の心が
なさきぬ あらば	情けがあれば
とうぶ とうりいに	飛ぶ鳥に
たゆりゆ むたしひょうり	便りを持たせてください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ287)

[訳] 乙女の心に情があれば、飛ぶ鳥に便りを持たせてほしい。

② 風に伝言を頼みたい

次の事例は、伝言する手段が風であり、それが不可能なことも知っている。琉歌にも類歌がある。「たより 押 風の もの いゆ もの やれは 日々の おとつれも 聞らやすか (吹く風が言葉を話すものであれば 毎日の音信も聞くことができるのだが)」(『古今琉歌集』1006)。

[資料109]

14 ばいぬ 風まぬ	南の風っ子が
むぬ いず むぬ やりか	もの言うものなら
ばあ 事ゆ いやり し	私のことを伝言して
問い聞くんだら	問い聞くだらう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ18)

[訳] 南の風が物を言うものであれば、私のことを伝言してあちらのことも尋ねるのだが。

③ 声が届かない

次の事例は、朝夕いつも見られるものなら、物を言えば届く所であれば、と声の届かないところに隔てられた辛い心を表現している。

[資料110]

1 朝夕 兼にて	朝夕いつも
見らり むぬ やらば	見られるものなら
言葉ゆ 言ざば	ものを言えば
届く かた やりば	届く所であれば

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ77)

[訳] 朝夕いつも見ることができるものであれば、物を言えば届く所であれば。

## 第二項 通う

相手のもとに通う局面の歌は、人目を避けたいので①月が曇ってほしい、②人目を避けて通う辛さ、③通う意欲の強さ、④通う喜び、⑤出て来て会ってほしい、⑥会えて嬉しい、⑦会えなくて辛い、などの心を表現する。

① 月が曇ってほしい

次の事例は、彼女と私が忍び会う夜なので、消かに照る月も曇ってください、と人目を避けて通う男の願望を表現している。消かに照る月は通常であ

れば美しいものとして評価されるが、恋人のもとに通うときにはその姿を人目にさらすので、迷惑なものと表現される。琉歌にも類歌がある。「笠に顔かくす 忍ぶ 夜や 知らぬ さやか 照りわたる 月の 恨めしや (笠で顔を隠して忍んでいく夜を知らないで清かに照り渡る月が恨めしい)」(『琉歌百控』310)。

[資料111]

2 無蔵と 我とぬ	あなたと私との
忍ぶ 夜 なりば	忍ぶ夜になれば
さやか 月ん	輝く月も
曇て たぼり	くもってください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ68)

[訳] 彼女と私が忍び会う夜なので、清かに照る月も曇ってください。

② 人目を避けて通う辛さ

次の事例は、隠れ忍びはかわいいそうなものだね、道の角に立ったまま夜を明かしている、というものである。この歌が当事者のものであれば、やや自嘲気味に忍ぶ心を表現したものと解釈できるが、第三者の歌であれば、忍ぶ人にたいする同情の心を表現したものと解釈される。あるいは忍ぶ人にたいする皮肉か。

[資料112]

1 かくりしぬびや	隠れ忍びは
あわりぬ むぬ やるらー	苦しいものであるね
みちいぬ かどうとうてい	道の角では
たちりどう ゆう あかす	立ちてぞ夜を明かす

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ42)

[訳] 隠れ忍びはかわいいそうなものだね。道の角に立ったまま夜を明かしている。

次の事例は、隠れ忍びで辛い思いをしているのは私だけではない、他人は

もっとひどいものだ、というもので、自分はそれほどでもないという心を表現している。

[資料113]

2	かくりしぬびや	隠れ忍びは
	ばぬ たんがー あらぬや	私だけではない
	ゆしいぬ ういや	他人の上は
	ゆくどう まさる	もっとひどい

(『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トウバラーマ43)

[訳] 隠れ忍びをするのは私だけではない。他人はもっとひどいものだ。

③ 通う意欲の強さ

次の事例は、石ころ道を踏んでは転がったりしながら眠るべき夜の間も通ってみるよ、というもので、どんな辛い状況であっても、通ってみせる、強い意欲を表現している。恋人のもとに通う時にはどんな障害も苦にならないという表現は琉歌にも類歌がある。「わかさ ひとゝきの かよひちの 空や やみの さくへらも くるま たう原 (若いとき恋人のところに通う路は、闇の夜のけわしい谷の急な坂でも平坦な車道のようなものだ。)」(『古今琉歌集』563)。またトーガニにも類歌がある。

のざアきむつ	野崎道
いさらむつど	石道
やりやまい やうい	であっても
はが おもひ 通ふちかあ	わが思いが通ったならば
おきなうさ やうい	小石で突き固めた石粉道である

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね64)

[資料114]

11	いせーらみちいば	石原道を
	ふんさり うてうて し	踏みさり落ち落ちし
	ゆるぬ にぶみん	夜の寝る目にも
	かゆいみるけ	通ってみるよ

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ151）

〔訳〕 石ころ道を踏んでは転がったりしながら、眠るべき夜の間も通ってみるよ。

④ 通う喜び（悪い道も問題ない）

次の事例は、会いたくてじっとしてられない時は、草深い道も苦にならない、というもので、難儀や苦勞も気にならず、通う喜びのほうが勝っていることを表現している。

〔資料115〕

52 きむん きむし	あなたを慕う
うらん ばしゅや	焦がれ心には
あざりみちん	草深い道も
あてねな一ど うる	気にさえならない

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ192）

〔訳〕 心が急いてじっとしてられない時は、草深い道も苦にならない。

通う喜び（闇の道も明るく感じる）

次の事例も、通う喜びのほうが勝っていることでは、前例と同様であり、通う夜の道は、闇の夜でも明るく感じる、と前例よりもなお喜びの心が強い。

〔資料116〕

21 思い まさる	思いのまさる
ゆるぬ みちいや	夜の道は
やみぬ ゆん	闇の夜も
あかさ すんや	明るくするように

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ161）

〔訳〕 思いの勝って通う夜の道は、闇の夜でも明るく感じる。

通う喜び（長い道も短く感じる）

次の事例は、心の美しい人の情にほだされて、千里の道さえ布の長さだ、

手拭いの長さだ、というものである。通う喜びに比べれば、どんな遠距離も苦にならない心を表現している。布の長さ、手拭いの長さは、短いものの比喩であり、船旅の歌で用いられる表現である。

[資料117]

50	きいむぬ かいしゃん	心が美しく
	なさきん ふだされ	情けにほだされ
	しんりみちいだぎ	千里の道さえ
	ぬぬなぎ さぢいなぎ	布の長さ手拭いの長さ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ190)

[訳] 心の美しい人の情にほだされて、千里の道さえ布の長さだ、手拭いの長さだ。

次のトーガニの事例では布や手拭いの長さは短いものであるが、それでもなお長い、ガジマルの葉のようにもっと短くあれ、と早く旅から戻ってきてほしいという気持ちを表現している。

ぬのなげん あて ながさ	布の長さもあまりに長い
てさづなげん とき ながさ	手巾の長さもあまりに長い
にわに うゑたる	庭に植えてある
がづばなぎいの	榕樹(がじまる)の木の
ばアの なげ やうい	葉の長さよ

(『南島歌謡大成III宮古篇』「宮古島の歌」たうがね68)

⑤ 出て来て会ってほしい

次の事例は、人目を避けて通って来たから、今日の願いを聞き入れてください、というものである。「今日の願い」が「会いたい」ということであれば、ここに分類されるが、あるいは「告白の歌」であろうか。「隠れ巡り」ということばは忍ぶことであるから、それからすると、すでに恋愛関係にある仲であろうと推測される。

[資料118]

37	かくりみぐり し	隠れ巡りして
	通いどう 吾 来たよ	通って私は来たよ
	きゆぬ にがいば	今日の願いを
	しいきうけ たぼうり	聞きとりください

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ177)

[訳] 私は隠れ巡りして通ってきたよ。今日の願いを聞き入れてください。

⑥ 会えて嬉しい

次の事例は、何日もかけて通ってやっと会えた喜びの心を表現している。

[資料119]

157	むむゆ かゆいぬ	百夜通いの
	んにが うい	胸の上
	いかり とうきいでん	行き会い時とも
	いら さにしゃ	ああ嬉しい

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ297)

[訳] 百夜通いの胸の上、会えた今は、ああ嬉しい。

⑦ 会えなくて辛い

次の事例は、思って通えば千里も一里ほどだ、会わずに戻れば元の千里だ、というものである。恋心の法則を説いていると解釈することもできるが、それよりも、当事者の、個別具体的な状況における心情、つまり、期待に胸を踊らせながら通ったが、会えずに戻ることになった心理の落差を表現していると解釈したほうがよいであろう。

[資料120]

22	うむてい かゆらば	思って通えば
	しんりん いちいり	千里も一里
	あわん むどうらば	逢わずに戻れば
	むとうぬ しんり	元の千里



（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ162）

【訳】 思って通えば千里も一里ほどだ、会わずに戻れば元の千里だ。

第三項 待つ

待つ局面の歌は、①待つ・呼ぶ、②出て来てほしい、③訪ねて来ない辛さ、④待っていてくれて嬉しい、⑤愛を疑う、などの心を表現する。トゥバラーマの待つ歌は、相手が通ってくるのを家で待つことよりも、野外で待ち合わせたり、屋外に呼び出したりすることを表現する例が多い。

① 待つ・呼ぶ

次の四例は、松の下で待っているよ、愛しい人よ、ヤラブ木の下で呼ぶよ、愛しい人よ、待ち合わせを表現している。語呂合わせ的な面がある。

【資料121】

2 まちいぬ しいたなんが	松の下で
まちうんどー かぬしえー	待っているよ 愛しい人
やらぶぬ しいたなんが	ヤラブ木<テリハボタ>の下で
やらぶんさ	呼ぶよ
かぬしゃー	愛しい人

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ45）

【訳】 松の下で待っているよ、愛しい人よ。ヤラブ木の下で呼ぶよ、愛しい人よ。

【資料122】

141 松ぬ下なんが	松の木の下で
待ちうんどよ かなす	待っているよ乙女
やらぶきーしいたなんが	ヤラブ木<テリハボク>の下で
やらぶんど めるび	呼ぶよ乙女

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ281）

【訳】 松の下で待っているよ、愛しい人よ。ヤラブ木の下で呼ぶよ、乙女よ。

[資料123]

- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1 やらぶ木ぬ 下なんが | ヤラブ木<テリハボク>の下で |
| やらばーばー       | 呼べば            |
| 松ぬ 下なんが      | 松の下で           |
| だしかに まちぶらば   | 確かに待っておれば      |
| (作詞 仲島一夫)    |                |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ139)

[訳] ヤラブ木の下で呼ぶよ。松の下で確かに待っているよ。

[資料124]

- |                |          |
|----------------|----------|
| 164 やらぶぬ したなんが | ヤラブの木の下で |
| やらぶんどう 美童      | 呼ぶよ乙女    |
| 松ぬ 下なんが        | 松の下で     |
| まちなんどう 美童      | 待っているよ乙女 |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ304)

[訳] ヤラブの木の下で呼ぶよ、乙女よ。松の下で待っているよ、乙女よ。

② 出て来てほしい

次の事例は、トウバラーマやシヨンカネーを歌って歩くからそれを聞いて出てきてほしいと、歌声を待ち合わせの手段にしている。歌声を頼りに居場所を知るのである。

[資料125]

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| 2 とぅばるま しょんかねーまー | トウバル マシヨンカネーを |
| いずどう し あらぐんけん    | 語り続けているうちに    |
| かぬし みやらび         | 愛しい乙女よ        |
| たんでい きいひーりよう     | どうか来てくれ       |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ56)

[訳] トバルマ、シヨンカネーを歌って歩いているので、愛しい乙女よ、どうか出て来ててください。

次の二例も、歌を待ち合わせの手段に用いているが、それを聞いて出てきてほしいという心を表現している。

[資料127]

- |           |       |            |
|-----------|-------|------------|
| 1 うたば     | しいきいり | 歌を聞いて      |
| いでーくうよー   | かぬしゃー | 出て来いよ 愛しい人 |
| くいば       | しいきい  | 声を聞いて      |
| とうんでいくうよー | かぬしゃー | 出て来いよ 愛しい人 |

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ44)

[訳] 歌を聞いて出ておいで、愛しい女よ。声を聞いて飛んでおいで、愛しい人よ。

[資料128]

- |         |      |             |
|---------|------|-------------|
| 2 唄ば    | 聞き   | 歌を聞いて       |
| 走りくよー   | 乙女   | 走って来い乙女     |
| くいば     | ざばき  | 声を探して       |
| とんでくよよー | かぬしゃ | 飛んで来いいとしい人よ |
- (作詞 仲島一夫)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ140)

[訳] 歌を聞いて走っておいで、乙女よ。声を探して飛んでおいで、愛しい人よ。

③ 通って来てほしい

次の事例は歌意をよみとるのが難しいが、『とうばら一ま歌集』(石垣市発行)の解説によれば、二枚の睫毛が一枚になるとは皆が寝静まった頃、川の水が引いていったらとは人通りがとだえた頃を意味するようである。人目につかないその頃に通っていらっしゃい、と相手に依頼する心を表現している。

- |       |       |         |
|-------|-------|---------|
| ふたいら  | まーぎいぬ | 二枚の睫毛が  |
| びとういら | ならば   | 一枚になれば  |
| かーらぬ  | 水ぬ    | 川原の水が   |
| びぎし   | はらば   | 引いていったら |

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ3）

〔訳〕二枚の睫毛が一枚に重なって皆が寝静まった頃、川の水がすっかり引いた頃（人通りがとだえた頃）通っていらっしやい。

### ③ 訪ねて来ない辛さ

次の事例は、鶏も鳴けば私も泣いて、夜が明けると庭を眺めつくすばかりである、というものである。訪れを待っていたが、来なかったことへの空しい心を表現している。この文脈だけでは恋の歌とみる確証はなく、浮世の辛さを嘆く歌である可能性もある。だが、琉歌やトーガニでは、鶏は恋歌の景物としてよく用いられる。鶏は後朝の別れを知らせるものであり、それが鳴くと二人は別れなければならない。また鶏が鳴くまで訪ねて来ないので、鶏とともに泣き明かすという発想の歌もある。「一人 ねる 夜の つれなさや とりと もろともに 鳴きよあかち（ひとり寝る夜のつれなさはたとえようもない。鶏とともに泣き明かすばかりだ。）」（『古今琉歌集』838）。しかし、夜が明けても庭を眺めつづけている、という表現はこの歌独特のものである。

#### 〔資料126〕

1 とりん なきば	鶏も鳴けば
ばぬん なきなき し	私も泣いて
夜や 明きば	夜が明けると
みなかば みかみ し	（ひとり）庭をながめて

（作詞 内原新八）

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ131）

〔訳〕鶏も鳴けば私もともに泣いている。夜が明けると一人庭を眺めるばかりである。

### ④ 待っていてくれて嬉しい

次の事例は、待ち合わせで先に来て待っていた相手への愛しさを表現している。

[資料129]

121 ぴとうみ かくれー	人目を忍んで
出来たよう	出て来たよ
みやるび 待ちどう	乙女は待っていたのだね
うれーりゃんら んぞさ かぬし	たいそう愛しい人

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ261)

[訳] 人目を忍んで出て来たよ、乙女よ。待っていたのだね、愛しい女よ。

⑤ 愛を疑う (なぜ出て来ない)

次の事例は、愛しい女に誠意があるのなら、歌を聞いて走って来るだろうに、と会いに来ない相手の愛にたいする疑いの心を表現している。

[資料130]

3 かぬしゃまぬ	愛しき子が
まくとうぬ 者 やりか	真心のある者なら
歌ば しき	(私の) 歌を聞いて
ばりきんたら	走って来るだろう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ4)

[訳] 愛しい女に誠意があるのなら、歌を聞いて走って来るだろうに。

[資料131]

46 かぬしゃま	愛しい人は
まことぬ むぬ やりば	誠のあるものなら
歌ば 聞き	歌を聞いて
ばりきんたら	走って来るだろうよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ186)

[訳] 愛しい人に誠意があるのなら、歌を聞いて走って来るだろうに。

次の事例も、歌を歌ってもなんの音沙汰もない相手の愛を疑っている。

[資料132]

42 かぬしゃま 思いどう	愛しい人を思つて
とうばりやま いじうるよ	トゥバラーマを歌っているよ
言遣ぬ ねぬや	伝言のないのは
いきやしる くとうりや	如何なることなのか

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ182)

[訳] 愛しい人を思つてトゥバラーマを歌っているよ。伝言のないのはどうしたことだろうか。

第四項 会う

会う局面の歌は、琉歌では会えた喜びや共寝の相談などさまざまな心を表現するが、トゥバラーマのばあい、あなたは誰だと聞かれて相手の心を疑う表現だけがある。

① 愛を疑う (二心があるのか)

次の事例は、約束だったので北の門の戸を開けたのだ、誰と問うのは別の心をもっているのか、というものである。ほかにも通ってくる人がいるのかと愛を疑う心を表現している。類例が琉歌にもある。「約束の あてと ねやの 戸は たゝく たかすてやり いゆすや 二人 まちゆめ (約束があったから閨の戸はたたいたのだ。誰かというのは二人待っていたのか。)」(『古今琉歌集』298)

[資料133]

1 やくしく やたどうぬ	約束だったから
にしいぬ じょうぬ やどう あきだ	北の門の屋戸を (私は) 開けた
たるで いずすや	誰と言うのは
ゆくぬ きいむどう むちるらー	別の心をもっているね

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ51)

[訳] 約束だったので北の門の戸を開けたのだ。誰だと尋ねるのは別の心を

もっているのか。

## 第五項 離れていく

逢瀬を終えて二人が離れていく局面の歌は、離別を知らせるものへの恨みの心を表現する。離れていく局面の歌は琉歌でははなやかに展開されているが、トゥバラーマには少ない。

### ① 鶏を恨む

次の事例は、浜千鳥は満ち潮になると干潟を離れなければならないのでそれを恨みに思う、彼女と私とは後朝の別れを知らせる鶏を恨みに思う、というものである。離れていく局面の心を干潟の鳥と対比して表現している。次のような類例が琉歌にあることから、「鳴く鶏」は「後朝の別れを知らせる鶏」であることが推察される。「干瀬に ゐる 鳥や みち潮 うらめゆい 我身や あかつきの 鳥と うらめゆる（干瀬にいる鳥は満潮を恨み、私は暁の鶏を恨むばかりである。）」（『古今琉歌集』1455）

### [資料134]

2 浜千鳥や	浜千鳥は
満 潮ど 恨らみ	満ち潮を恨み
無蔵と 我とや	あなたと私とは
鳴く 鶏ど 恨らみ	鳴く鶏を恨む

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ110）

[訳] 浜千鳥は満ち潮を恨む。彼女と私は鳴く鶏を恨んでいる。

次の二例の「鳴く鶏」や「上がる太陽」も、後朝の別れに関連する景物であり、前例と同様の心を表現しているが、「殺して捨て」とか「太陽を闇になす」という極端な感情を表現している。

### [資料135]

2 鳴く 鶏ん	鳴く鳥を
殺しすてらるば	殺してしまえたら

昇がる 太陽ん  
闇 なさるば

昇る太陽を  
闇になさせたら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ80)

[訳] 鳴く鶏も殺して捨てることができるものなら。上がる太陽を闇になすことができるものなら。

[資料136]

2 鳴く とりや  
くるさるば  
あかる てだん  
やみ なざるばら  
(作詞 内原新八)

鳴く鳥が  
殺せるものならば  
上がりくる太陽も  
闇になすことができるならば

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ132)

[訳] 鳴く鶏も殺して捨てることができるものなら。輝く太陽を闇になすことができるものなら。

### 第三章 関係の破綻

関係の破綻のグループは(1)破綻寸前、(2)破綻の歌がある。破綻寸前の歌はもはや修復不能の段階にあるものが、破綻の歌は、破綻直後の感情を表現しているものがここに区分される。

#### 第一節 破綻寸前

破綻寸前の歌は、①互いに批難しあう、②私のことを諦めてくれ、などの心を表現する。

##### ① 互いに批難しあう

次の事例は、一緒になった時は聞かれるな見られるなど、別れる時は誰聞けどれ聞けと、いうものである。愛し始めた頃は二人の恋を他人に知られま



いとしたが、別れる頃には誰はばかりでもないさまを表現している。

[資料137]

- 1 なるだ めんや (一緒に) なった時は  
しいかりな みらりなでい 聞かれるな見られるなど  
ぬきる めんや 別れる時は  
たる しいきい じり しいきいで 誰聞けどれ聞けど  
(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ36)

[訳] 一緒になった時は聞かれるな見られるなど、別れる時は誰聞けどれ聞けど。

次の事例も、愛し始めた頃と別れる頃とを比較している。

[資料138]

- 10 なるだ めんや (一緒に) なった時は  
菜種子ぬ 油 たらし 菜種子の油のように口説き  
ぬきる めんや 別れる時は  
うら いじ ばぬ いじ 互いに非難しあい  
(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ14)

[訳] 一緒になった時は菜種子の油のように口説き、別れる時は互いに批難しあう。

② 私のことを諦めてくれ

次の二例は、島の夫を持ってくれ、他所の島の私のことは諦めてくれと自分から別れを通告している。一時的に滞在した男と島の女の恋を男の立場から表現している。ドゥナンズンカニの、転動していく役人と旅妻の離別のよな設定である。

[資料139]

- 69 しいまぬ ぶとうゆ 島の夫を  
むちひーりよ みやるび 持ってくれ乙女  
我が くとうや 私のことは

あきらめひーりよ

あきらめてくれよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ209)

[訳] 島の夫を持ってくれ、乙女よ。私のことは諦めてくれ。

[資料140]

1 島ぬ 夫

島の夫を

持ちひりよ みやるび

持ってくれよ乙女

我 事や

私のことは

あきらめひより

あきらめてくれよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ65)

[訳] 島の夫を持ってくれ、乙女よ。私のことは諦めてくれ。

## 第二節 破綻

破綻の局面の歌は (1)破綻の辛さ、(2)離れていく者への恨み、(3)相手の心変わり、などの心を表現する。さらに、(1)破綻の辛さは①生涯で一番辛い別れという心を表現する。(2)離れていく者への恨みは①あなたが私から離れていくとは、②二人は一体だと思ったのに、などの心を表現する。(3)相手の心変わりは①彼女の心が変わるとは、②人の心の変わりやすさ、などの心を表現する。

### (1) 破綻の辛さ

破綻の辛さは、今日の別れは生涯で一番辛い別れだ、という心を表現する。

#### ① 生涯で一番辛い別れだ

次の四例は、いつまでも一緒だと私は思っていた、今日の別れは生涯の辛い思いである、と恋愛関係の破綻を嘆き悲しんでいる。

[資料141]

2 幾世までん

幾世までも

ままでど 我 思うだ

一緒だと私は思った

今日ぬ 別りや

今日の別れは

生命中ぬ 思い

生涯の思いもの

（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トウバラーマ66）

[訳] 幾世までも一緒だと私は思っていた。今日の別れは生涯の辛い思いである。

[資料142]

12	いつゆまでいん	いつの世までも
	ままでどう ばな うもうた	一緒だと私は思った
	きゅうぬ 別りや	今日の別れは
	命じゅうぬ うむいむぬ	一生の思いもの

（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トウバラーマ152）

[訳] いつの世までも一緒だと私は思っていた。今日の別れは生涯の辛い思いである。

[資料143]

11	いちい世までいん	幾世までも
	ままでどう ばな 思うだ	（二人は）このままだと私は思った
	今日ぬ 別りや	今日の別れは
	命中ぬ 思いむぬ	生涯の思いもの

（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トウバラーマ15）

[訳] 幾世までも一緒だと私は思っていた。今日の別れは生涯の辛い思いである。

[資料144]

13	いつん ままでど	いつまでも一緒と
	ばな 思いうだしがら	私は思っていたが
	今日ぬ 別りや	今日の別れは
	命じゅうぬ 思いむぬ	一生の思いもの

（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トウバラーマ153）

[訳] いつまでも一緒だと私は思っていたが、今日の別れは生涯の辛い思いである。

次の事例は、いつまでも一緒だと私は思っていた、島のある限り語り合

うと私は思っていた、というもので、前例と類似している。嘆き悲しむ心は表面にはあらわれていないが、余情としてくみとれる心は前例と同じである。

[資料145]

2 幾世までん	幾世までも
ままでど 我 思うだ	一緒だと私は思った
島ぬ ある共	島のあるまでは
語るんで 我 思うだ	語ると私は思った

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ88)

[訳] 幾世までも一緒だと私は思っていた。島のある限り語り合おうと私は思っていた。

(2) 離れていく者への恨み

離れていく者への恨みは、①あなたが私から離れていくとは、②二人は一体だと思ったのに、などの心を表現する。

① 私から離れていくとは

次の事例は、情があると私は思っていた、私から離れていく心があっているのか、と相手にたいする恨みを表現している。

[資料146]

2 情 あんでど	情けがあると
我 思うだ	私は思った
我ぬば ぬけ行る	私を離れていく
くいむ ありんなー	心があっているのか

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ100)

[訳] 情がある人だと私は思っていた。私から離れていく心があっているのか。

② 二人は一体だと思ったのに

次の二例は、あなたと私の二人の仲からは吹き抜ける風さえないと私は思っていた、と相手の心変わりを嘆いている。二人の間からは「水も洩れない」「風も吹き抜けない」ほどに密着していることを強調した関係が、同じ表現方法を用いて破綻した愛を嘆くかたちになっている。

[資料147]

29 うらとう 吾とうぬ	あなたと私との
ふたなかからや	二人の仲からは
ふきる かぜーまんざん	吹き抜ける風さえ
ねーぬでどう ばなー うもうだ	ないと 私は思った

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ169)

[訳] あなたと私の二人の仲からは吹き抜ける風さえないと私は思っていたのに。

[資料148]

8 うらとう ばんとうぬ	あなたと私との
ふた仲からや	二人の仲からは
ふきる 風まんざん	吹き抜ける風っ子さえ
ねぬでどう ばな 思うだ	ないと私は思った

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ12)

[訳] あなたと私の二人の仲からは吹き抜ける風さえないと私は思っていたのに。

(3) 相手の心変わり

相手の心変わりは、①彼女の心が変わるとは、②人の心の変わりやすさ、などの心を表現する。

① 彼女の心が変わるとは

次の事例は、月を見ると昔のままなのに、愛しい女の心が変わるの不思議だね、と相手の心変わりを信じられないでいる心を表現している。心

変わりする相手を「かぬしゃ（愛しい女）」と表現しているので、この歌の抒情主体は男である。

[資料149]

2	ちいきい	みりば	月を見れば
	むかきいぬ	ちいきい やるらー	昔の月であるね
	かぬしゃ	ちむぬ	愛しい人の心が
	かわるそう	みざらさーらー	変わるのはめずらしいね

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ37）

[訳] 月を見ると昔のままの月だね。愛しい人の心が変わるのは不思議だね。

② 人の心は変わりやすい

次の二例は、月を見ると昔のままの月なのに、変わっていくのは野心家の心である、というものである。自然物の不変と対比して人の心の移ろいやすさを表現しているが、法則を説いているのではなく、心変わりした相手にたいする悲しみを表現しているのであろう。類歌が琉歌にある。「月や むかしの 月 やすか かわて 行 物や 人の こゝろ（月は昔の月であるけれど、変わっていくものは人の心だ。）」（『琉歌百控』60）。

[資料150]

1	ちいきい	見りば	月を見れば
	昔ぬ	ちいきい やしが	昔の月なのに
	変てい	いくすや	変わっていくのは
	やしんざぬ	くくる	野心家の心

（『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ5）

[訳] 月を見ると昔のままの月なのに、変わっていくのは野心家の心である。

[資料151]

77	ちいきいゆ	みりば	月を見れば
	むかしいぬ	ちいきい やしが	昔の月だが

変てい いくすや  
びいとうぬ くる

変わっていくのは  
人の心である

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ217)

[訳] 月を見ると昔のままの月なのに、変わっていくのは人の心である。

## 第四章 昔の恋

昔の恋は、恋愛関係がおわった、ずっと後に回想するものである。恋愛関係がおわったといっても、それは必ずしもすべての事例が破綻したものであることを意味するのではなく、今もともに過ごす元の恋人どうしが、過去を回想するかたちの歌もあるので、恋の歌ではなく、懐旧の歌に括るのがよいであろう。いずれにしてもこのような歌は宮古のトーガニにはみられない。琉歌には数多くみられる。

昔の恋の歌は①言葉が心に残っている、②情を残している、③昔の彼女と語り合いたい、④彼女を今も思い出す、⑤昔の彼女を今も忘れられない、⑥昔の通い路を偲ぶ、⑦他人の妻・夫になってしまった、⑧昔の恋を思う空しさ、などの心を表現する。

### ① 言葉が心に残っている

次の六例は、昔語り合った恋人の言葉を回想して、そこに今も残る愛情を感じている。はじめの二例は、枕を並べて語り合った睦言を思い起こしている。

#### [資料152]

1 枕 並びて	枕を並べて
言づだる 言葉	言った言葉は
幾世までいん	幾世までも
肝に 染まり	心に染まり

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ99)

[訳] 枕を並べて言った言葉は、幾世までも心に染まっている。

[資料153]

1 枕 並べて	枕を並べて
語るだ 言葉	語った言葉
幾世までいん	幾世までも
肝に 染まり	心に染まり

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ71)

[訳] 枕を並べて語った言葉は、幾世までも心に染まっている。

次の三例は、相手の情のこもった言葉を思い起こしているが、はじめの例は男の立場から、後の二例は女の立場から表現している。

[資料154]

146 みやらび なさきぬ	乙女の情けの
かたみぬ くとうば	形見の言葉は
きゆぬ なままでいん	今日の今まで
きいむに すまり	心に染まり

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ286)

[訳] 乙女の情の形見の言葉は、今日の今までも心に染まっている。

[資料155]

128 びらま 情ぬ	愛しい人の情けの
かたみぬ くとうば	形見の言葉は
きゆぬ なままでい	今日の今まで
きいむに うむいすみ	胸に思い染め

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ268)

[訳] 愛しい男の情のこもった形見の言葉は、今日の今までも心に思い染めている。

[資料156]

1 びらま 情ぬ	いとしい男の情けの (こもった)
かだみぬ 言葉	形見の言葉は
今日ぬ なま迄ん	今日の今まで



肝に 思い染め

心に思い染めている

(作詞 仲宗根長一)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ125)

[訳] 愛しい男の情のこもった形見の言葉は、今日の今までも心に思い染めている。

次の例は、二人で語り合った言葉を情のこもったものとして表現している。

[資料157]

1 無蔵と 我とぬ	あなたと私とが
語れる 情	語った情け
幾世までん	幾世までも
肝に 染まり	心に染まり

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ91)

[訳] 彼女と私とが語った情、幾世までも心に染まっている。

② 情を残している

次の事例は、昔、恋人からもらった花染めの手拭いに今でも愛情を感じていることを表現している。

[資料158]

158 めるび なさきゆ	乙女の情けの
はなすみていさじ	花染めの手拭い
きゆぬ なままでいん	今日の今まで
なさきば うむい残し	情けを思い残し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ298)

[訳] 乙女の情の花染めの手拭いは、今日の今までも情を残している。

以下の四例は、昔の恋人に今でも愛情を感じていることを表現している。はじめの例の「口から出ださらぬ(口から出せない)」という語句は筆者にはわかりにくい。自分一人の思い出として残したくて「口外しない」のか、

あるいは、今も深い愛情が残っていて「言葉にすることができない」のだろうか。

[資料159]

1 かぬしゃ くとや	愛しい人のことは
口から 出ださらぬ	口から出せない
今日ぬ なままで	今日の今まで
情ば 残くし	情けが残り

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ81)

[訳] 愛しい女のことは口から出せない、今日の今まで情を残している。

次の三例は、昔「花と露の縁（男女の仲）」を交わした相手の情が、今も自分の心に残っていることを表現している。

[資料160]

148 むかしい あしいべーる	昔遊んだ
ちいゆとう 花 やしが	露と花だが
きゆぬ なままでいん	今日の今までも
なさきば うむい残り	情けが思い残り

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ288)

[訳] 昔遊んだ露と花の仲だが、今日の今までも情が残っているよ。

[資料161]

2 昔 遊べる	昔遊んだ
花と つゆ やしが	花〈私〉と露〈あなた〉であるが
今日ぬ なままでん	今日の今まで
情ば 思い残し	情けを思い残している

(作詞 山里勇吉)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ130)

[訳] 昔遊んだ露と花の仲だが、今日の今までも情を残しているよ。

[資料162]

1 昔 遊すべる	昔遊んだ
----------	------

花と 露 やしが  
今日ぬ なま迄  
情ば 思い残くし

花と露だが  
今日の今まで  
情けを思い残し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ83)

【訳】 昔遊んだ露と花の仲だが、今日の今までも情を残しているよ。

③ 昔の彼女と語り合いたい

次の事例は、十七八歳頃に愛した女と、一夜だけでも思いを語り合えたら、という心を表現している。昔「思慕」のまま終わった恋を回想している。

【資料163】

71 十七八頃

思うだる かぬしゃと  
一夜 やらばん  
思い 語いらばら

十、七八歳頃

思った愛しい人と  
一夜であつても  
思い語らえたなら

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ211)

【訳】 十七八歳頃に愛した愛しい女と、一夜だけでも思いを語り合えたらね。

④ 彼女を今も思い出す

次の事例は、島を離れて私は思っているよ、今日の今までも愛しい人を思い出している、というもので、長い時間の経過とともに場所も遠く隔たったところからの回想を表現している。

【資料164】

68 しいま はなれー

ばなー うむいらー  
きゆぬ なままでいん  
かぬしゃま 思い出し

島を離れて

私の思いはね  
今日の今までも  
愛しい人を思い出し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ208)

【訳】 島を離れて私は思っているよ、今日の今までも愛しい人を思い出して

いる。

次の事例は、川平湾の情景が美しいことをきっかけにして、昔の愛しい人の姿を思い出してしまった心を表現している。

[資料165]

47 川平ぬわんぬ 姿ぬ	川平湾の姿が
かいしゃ	美しいことよ
昔 かぬしゃぬ 姿ゆ	昔の愛しい人の姿を
思い出し	思い出し

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ187)

[訳] 川平湾の姿が美しいことよ、昔の愛しい人の姿を思い出してしまうよ。

⑤ 昔の彼女を今も忘れられない

次の事例も、昔の恋人を回想するものであるが、それを「忘れられない」と表現している。「胸から下るさらぬ（胸から下ろせない）」という語句は、心からはなせない、忘れられないの意。

[資料166]

1 忘れて 忘しららん	忘れても忘れられない
かぬしゃま 事ぬ	愛しい人のことが
今日ぬ なままで	今日の今まで
胸から 下るさらぬ	胸からおろせない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ113)

[訳] 忘れようにも忘れられない、愛しい人のことが、今日の今まで胸から降ろせない。

次の二例は、昔の恋人の香りがいつまでも心に残っていることを表現している。「若さばだ」「若さ花」は、本来いずれも「若い頃」の意であったと考えられるが、トゥバラーマの創作者や伝承者の一部では「若い肌」「若い花」と解釈する傾向が見受けられる。

[資料167]

114 若さばだぬ	若い頃の
かばさや いちまでん	かおりはいつまでも
肝に すまり	心に染まり
胸から うるさるぬ	胸からおろせない

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ254)

[訳] 若い頃の香りは、いつまでも心に染まって胸から降ろせない。

[資料168]

1 ばがさ 花ぬ	若い花<乙女>の
かばさや いちまでいん	芳しさはいつまでも
きむに 染まり	心に染まり
胸から うるさるぬ	忘れられない

(作詞 多字 正)

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ133)

[訳] 若い頃の香りは、いつまでも心に染まって胸から降ろせない。

次の事例は、昔の恋人のことを回想して今も変わらない愛情を感じていることを表現している。

[資料169]

95 なさき かきたる	情けをかけた
むかしぬ みやらび	昔の乙女
いちん かわらぬ	いつも変わらない
松ぬ 葉ぬ ぐと	松の葉のよう

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ235)

[訳] 情をかけた昔の乙女よ、いつも変わらない松の葉のようだ。

⑥ 昔の通り路を偲ぶ

次の二例は、昔、二人で通ったあの細道が、今となっては草が生い茂っていると、過去のデートコースについて二人で感慨をとみにしている。「あな

たと私が「私達二人が」と、ともにいる現在の時点から過去を回想する者  
どうしであるから、二人の關係に破綻はなかつたことが窺える。

[資料170]

6 うらとう ばんとうぬ	あなたと私とが
通うだ いばみちえーま	通つた狭い道は
なまに なり ふさまば	今になつては草が
むいかばし	生い茂り

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ10)

[訳] あなたと私が通つた狭い道は、今になつては草が生い茂っている。

[資料171]

2 ばが ふたーりいぬ	私達ふたりの
かようだる いばみちいや	通つた狭道は
なまに なり	今では
あうのりいぬ ふいらー	青海苔が生えぬ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ41)

[訳] 私達二人の通つた狭い道は、今になつては青海苔が生えているね。

次の事例は、昔、恋人に会うために通つた、人目につかない狭い道が、今  
となつては根株が覆い被さつてると、過去の通い路についての感慨を表現  
している。前の歌と類歌であるが、このばあいは一人での感慨である。感慨  
を共有する相手がないので、この恋は破綻したものであり、それを哀惜し  
ているように思われる。

[資料172]

150 むかしい 通うだ	昔通つた
かくりぬいばみちいや	隠れの狭道は
なまばなり	今になり
かぶすば むいかばし	根株を生えかぶし

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ290)

[訳] 昔通つた、人目につかない狭い道は、今になつては根株が覆い被さつ  
ているよ。

次の事例は、昔、恋人に会うために通った狭い道が、今となっては大道になっていると、過去の通り路についての感慨を表現している。道の変化のしかたは異なるが、前例と類歌である。

[資料173]

1 若き 花に	若い時に
通たる 狭路	通った狭道
今ば なり	今になったら
大道 なりうり	大道になっており

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ105)

[訳] 若い時に通った狭い道は、今となっては大きな道になっているよ。

⑦ 他人の妻・夫になってしまった

次の三例は、昔の恋人が他人の妻や夫になってしまった感慨を表現している。はじめの二例は男の立場からの歌で、最後の例は女の立場からの歌である。

[資料174]

153 むかしい むちいりだ	昔睦みあった
かぬし めるべ	愛しい乙女
なまや ゆすだみ びとうだみ	今は他人為人為に
なりきしらー	なってしまったね

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ293)

[訳] 昔睦みあった愛しい乙女は、今は他人の嫁になってしまったよ。

[資料175]

6 あんだぎ かなさーる	あれほど愛しい
みやるび やだすんが	乙女であったが
びいとうてーに はりぬ	他人の手になってしまった
きいむぬ くりしや	胸の苦しきよ

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トウバラーマ146)

[訳] あれほど愛しい乙女であったが、他人の手になってしまった、心が苦

しい。

[資料176]

2 あんだぎ かぬさる	あれほど愛しい
とばら一ま	愛しい人は
年ば 取り	年をとり
他そだみ なりねぬ	他人の為になってしまった

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ108)

[訳] あれほど愛しい殿方は、年を経て他人のものになってしまった。

⑧ 昔の恋を思う空しさ

次の事例は、昔の恋人のことを思い出してみても何の役にたたないと、回想することの空しさを表現している。相手が「やしんざ（野心家）」であることも思い起こしたくない理由の一つであろう。

[資料177]

4 むかしくとう 思い	昔のことを思ってみても
のうぬ ゆうじゅ あゆが	何の役にたつか
やしんざ 事 思い	野心家のことを思っても
いきや ため なゆが	如何なるためになるか

(『南島歌謡大成IV八重山篇』トゥバラーマ8)

[訳] 昔のことを思ってみても何の役に立とうか、野心家のことを思ってみても何のためになろうか。

[付記]

本稿は2005年7月3日に「沖縄言語研究センター 公開講演会・研究発表会」で研究発表した原稿を若干修筆したものである。なお、歌詞の引用に際しては『南島歌謡大成IV八重山篇』の歌詞と対訳をそのまま例示したが、それとは別に筆者による [訳] を追加して解釈の相違するところを示した。



【参考文献・資料】

外間守善・比嘉実・仲程昌徳『南島歌謡大成Ⅱ沖繩篇下』

外間守善・新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』

外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』

ニコライ・ネフスキー『宮古のフォークロア』

『伊良部村史』